令和４年度
修了生による教育評価報告書

令和５年10月

香川大学大学院地域マネジメント研究科

目次

総　括 1
第１章　　修了生による大学院教育評価アンケート調査の概要 4
１．　調査の目的 4
２．　調査実施期間 4
３．　調査対象 4
４．　調査の内容 4
５．　集計方法 4
第２章　　調査結果について 5
１．　回答者の属性 5
（１）　入学時の年齢（質問 45） 5
（２）　入学時の自宅所在地及び勤務地（質問 46） 5
（３）　入学時の就業状況、職種、役職について（質問 47、48、49） 6
（４）　現在の就業状況、職種、役職について（質問 50、51、52） 8
２．　在学当時の状況について 9
（１）　在学中の出席状況について（質問 12） 9
（２）　在学中の勉強時間（質問 13） 9
（３）　仕事で役立ったと思う科目（質問 14） 10
（４）　仕事とは関係ないが、役立ったと思う科目（質問 15） 11
（５）　教養科目の必要性（質問 16） 12
（６）　土曜日の開講について（質問 17） 13
（７）　履修登録単位数の上限について（質問 18） 13
（８）　プロジェクト研究について（質問 19、20、20-2） 13
（９）　自習室、教室の環境について（質問 21、22） 15
（１０）　本研究科 PC ルームの利用状況について（質問 23、24、25） 16
（１１）　オンラインでの授業科目や受講について（質問 26、27、28） 17
３．　在学当時の支援関係について 20
（１）　社会人組織、社会人組織以外からの支援について（質問 29、29-2、30、30-2） 20
（２）　学部学生の就職について（質問 31） 22
（３）　現在の仕事で必要な能力と大学院教育で身についた能力（質問 32） 23
（４）　地域や社会への関心について（質問 33、34） 27
（５）　人的ネットワークの構築について（質問 35） 28
（６）　学んだことに満足しているかについて（質問 36） 28
（７）　愛着について（質問 37） 29
４．　現在の状況について 31
（１）　自己研修について（質問 39） 31
（２）　地域活動について（質問 40） 31
（３）　研究科開催の講演会・シンポジウムなどについて（質問 41、42） 33
（４）　後期（10 月）入学の必要性について（質問 43） 34
第３章　　自由記述のデータ 35

総　括

- 令和 4 年度修了生 36 人中 21 人からアンケートへの回答があった（回答率 58.3%）。

- 令和 4 年度修了の 18 期生の属性の特徴は以下の通りである。
  ・40 代が 4 割弱と一番多く、次いで 30 代が 3 割弱、20 代と 50 代が 1〜2 割程度と分散している。
  ・自宅所在地は約 6 割が高松市、勤務地も約 6 割が高松市である。
  ・入学時、修了時共に 9 割以上が就業している（「正規雇用」「非正規雇用」の合計）。
  ・入学時の職種は、「保健・衛生・医療関係」「サービス関係」「公務員」が半数を占める。
  ・入学当時の役職は「主事、一般社員・一般職員、係員」が最も多い。

- 在学中の出席状況は、すべての授業に出席した場合を 100%として平均 94.5%である。
  前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では 95.7%であった。

- 週当たりの勉強時間は、14.1 時間である。
  前回アンケート調査では、17.5 時間である。

- 仕事で役立ったと思う科目は、「プロジェクト演習・研究」と回答した人が最も多い。仕事とは関係ないが、役立ったと思う科目は、「マーケティング戦略」と回答した人が多い。
  前回のアンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では、仕事で役立ったが「組織行動論」で、仕事とは関係ないが役だったが「定性的研究方法論」「デザイン・マネジメント」との回答数が最も多かった。

- 教養科目の必要性について、「教養科目は必要で、あれば受講したかった。」とする回答が 33.3%であった。一方、「教養科目は必要だとは思わない。or 今提供される科目で十分である。」とする回答が 57.1%であった。

- 土曜の開講は、「必要（71.4%）」「ある程度必要（19.0%）」で合計 90.4%となり、土曜日開講の必要性は高い傾向にある。
  前回アンケート調査(令和 2 年度修了生対象)では、「必要（66.7%）」「ある程度必要（26.7%）」で合計 93.3%であった。

- プロジェクト研究については、肯定的な回答が 85.7%(18 人)であった(「満足している」が 38.1%、「ある程度満足している」が 47.6%)。
  前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では、「満足している」が 53.3%、「ある程度満足している」が 33.3%で合計 86.6%であり、肯定的な回答の割合が高くなっている。

- プロジェクト研究担当教員以外の指導については、「助言・指導は受けなかった」とする回答が 52.4%と最も多く、次いで「充分な助言・指導を受けた」「充分とはいえないが、助言・指導を受けた」との回答が 23.8%となっている。助言・指導を受けた人物は本研究科の

教員が最も多い（助言・指導を受けた者のうち 90.0%が本研究科教員を助言・指導者として挙げている）。

- 教室環境の満足度について、肯定的な回答は 95.2%である。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では肯定的な回答が 100.0%である。
  自習室環境の満足度について、肯定的な回答は 76.2%である。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では肯定的な回答が 83.3%であり、これと比べると低くなっている。

- 本研究科 PC ルームの利用状況については、「ほとんど利用しなかった」とする回答が 42.9%と最も多く、次いで、「１ヶ月に２～３回程度」「イベントやプロジェクト研究等で特定の時期のみに集中的に利用」が 14.3%、1 ヶ月に 1 回程度」が 4.8%となっている。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では「ほとんど利用しなかった」とする回答が 53.3%であり、それと比べると利用状況は改善している。

- 授業の受講方法については、「授業は主に対面で受講した。」「授業は主に対面で受講したが、事情に応じてオンラインで受講することもあった」が 47.6％で最も多い。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では「授業は主に対面で受講したが、事情に応じてオンラインで受講することもあった」とする回答は 63.3%であり、対面での受講にシフトしている。

- 「コロナ感染症が終息した後もオンラインの授業は必要である」に対する肯定的回答は 71.4%となっている。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)における肯定的回答の割合は 76.7%であり、肯定的回答の割合はやや低下している。

- 所属組織からの入学・勉学の支援の有無について、「受けた」とする回答は 42.9%であり、支援内容については「学費の補助」が 77.8%と最も多く、次いで「勤務調整」が 44.4%となっている。

- 所属組織以外からの支援の有無については、「受けた」とする回答は 31.6%であり、支援内容は「専門実践教育訓練給付金」が 83.3%と最も多い。

- 学部からの進学生（2 名）を対象に就職支援への満足度を尋ねた設問では、「ある程度満足している」とする回答 50.0%（１人）と「不満である」とする回答 50.0%（１人）に分かれている。

- 現在の仕事で必要な能力として「自分の意見をわかりやすく伝える力」を、大学院教育で身についた能力として「意見の違いや立場の違いを理解する力」を最も高く評価している。

- 入学前の地域や社会への関心については、関心を有するという回答が 76.2%となっている。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では、肯定的回答は 80.0%であった。

- 入学後の関心の変化については、「関心が高まった」とする回答が 100.0%となっている。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では同回答は 86.7%であり、割合が高くなってい

る。

- 研究科における人的ネットワークの構築については、肯定的な回答が 71.4%となっている。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では肯定的な回答は 76.7%であり、割合が低下している。

- 総合的な満足度については、肯定的な回答が 95.2%となっている。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)でも肯定的回答が 100.0%であり、割合が低くなっている。

- 研究科への愛着については、肯定的な回答が 85.7%となっている。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では肯定的回答が 100.0%であり、割合が低くなっている。

- 能力向上のための自己研修について、「行っている」「予定している」が 42.9%（9 人）となっている。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では、「行っている」「予定している」の合計は 73.3%であり、大きな差が見られる。

- 個人あるいはグループで地域のための活動を行っているかという設問については、「行っている」「予定している」が 33.3%となっている。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では、「行っている」「予定している」は 36.7%であった。

- 研究科で開催する講演会・シンポジウムへの参加意向について、肯定的回答「思う」は 85.7%（18 人）となっている。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では同回答は 93.3%であった。

- 研究科で開催する講演会・シンポジウムの開催方法については、「一般公開」とする回答が 90.5%である。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では、同回答は 76.7%となっていた。

- 研究科への後期入学の必要性については、肯定的回答は 33.3%であった。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では、同回答は 40.0%であり、肯定的回答の割合が低下している。

第１章　　修了生による大学院教育評価アンケート調査の概要

１．　調査の目的

この度、本研究科の令和４年度修了生を対象に大学教育評価に関するアンケート調査を実施し、その調査結果を「修了生による大学院教育評価報告書」に取りまとめた。

この調査の目的は、本研究科の提供する専門職大学院教育の成果・効果を明らかにするとともに、本研究科に対する要望等を把握することを目的として実施することである。

２．　調査実施期間

令和５年３月 14 日（火）～令和５年３月 24 日（金）

３．　調査対象

（１）調査対象と調査方法

調査対象は、令和４年度地域マネジメント研究科の修了生全員である。調査は Microsoft Forms を用いて実施した。

（２）回収数及び回収率

アンケート調査の回収数は、令和４年度修了生 36 人中 21 人から回答があった(回答率 58.3%)。

４．　調査の内容

アンケート調査の質問項目は、Ⅰ.在学当時の状況について、Ⅱ.在学当時の支援関係について、Ⅲ.修了時の効果について、Ⅳ.現在の状況について、Ⅴ.香川大学、本研究科へのご要望、Ⅵ.あなた自身について、の６項目についてである。

５．　集計方法

集計方法は、質問ごとに単純集計を行い、合計数とその割合（小数点第１位未満を四捨五入）を％で表示した。

第２章　　調査結果について

１．　回答者の属性

質問 45～質問 52 は、回答者（修了生）の入学時の年齢、自宅所在地及び勤務地、就業状況、職種等を問うたものである。

（１）　入学時の年齢（質問 45）

入学時の年齢については、40 歳代（38.1%）が最も高く、以下、30 代（28.6%）、20 代（19.0%）、50 代（14.3%）、60 代(0.0%)と続いている（図 1 を参照）。

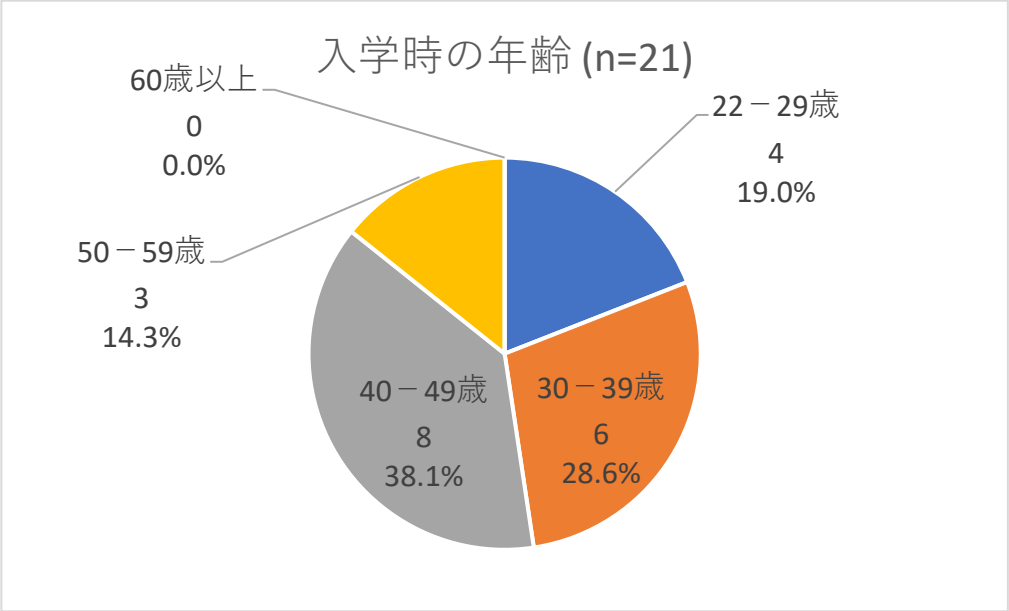
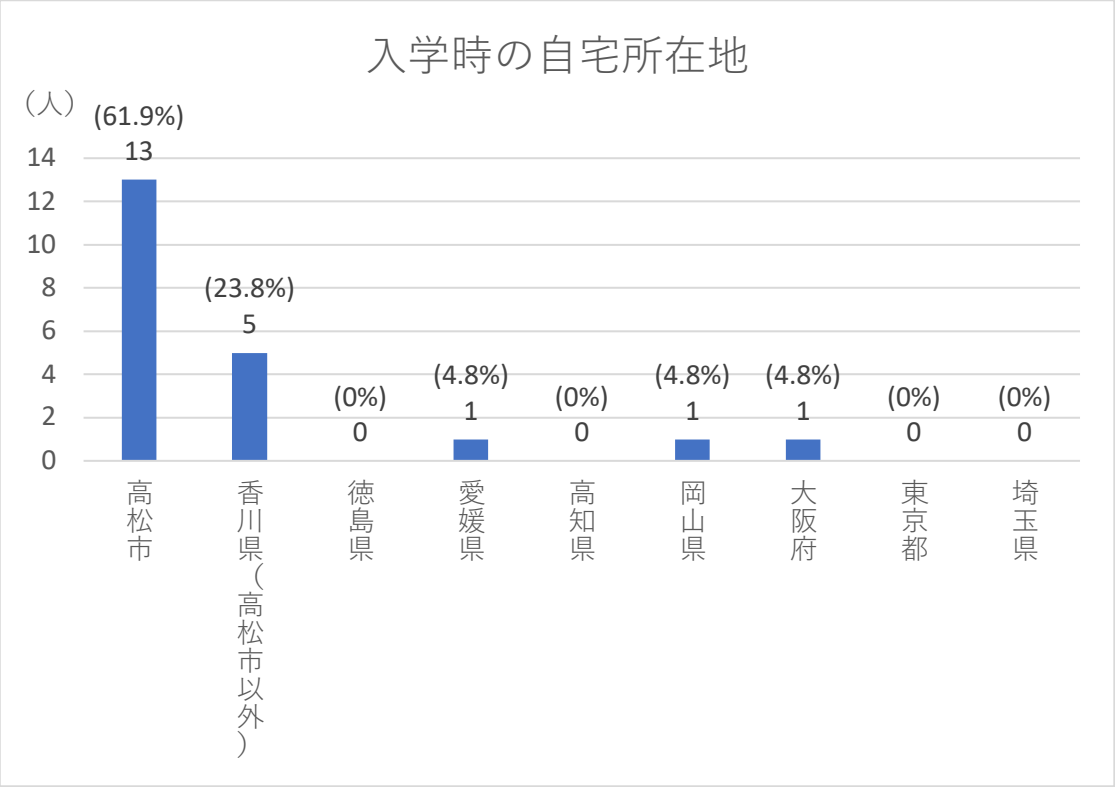


図 1　入学時の年齢

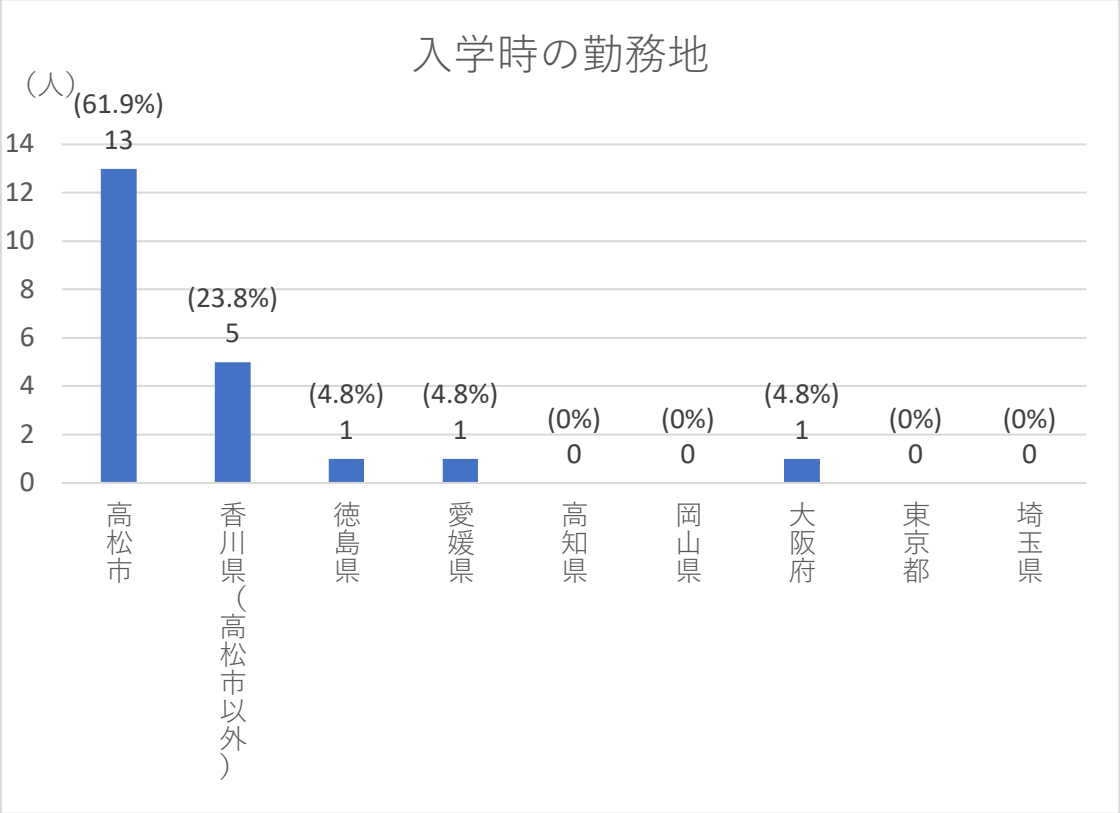
（２）　入学時の自宅所在地及び勤務地（質問 46）

研究科入学時における自宅所在地は、高松市 61.9%（13 人）で、高松市以外の香川県内 23.8%（5 人）、県外は 14.3%（愛媛県 1 人、岡山県 1 人、大阪府 1 人）である。

勤務地は、高松市 61.9%（13 人）、高松市以外の香川県勤務地は 23.8%（5 人）となっている。



3/21



（３） 入学時の就業状況、職種、役職について（質問 47､48､49）

問 47 は本研究科の修了生が入学時に正規雇用で働いているか、非正規雇用で働いているかを問うたものである。正規雇用が 85.7%（18 人）、非正規雇用 14.3%（3 人）、働いていない 0.0%（0 人）である。

職種は、保健・衛生・医療関係 19.0%（4 人）、サービス関係 19.0%（4 人）、公務員（国・地方自治体）14.3%（3 人）が半数を占め、他にも様々な業種が見られる（図 2）。

役職は、「主事、一般社員・職員、係員」が 38.1%（8 人）と最も多く、それに次いで「主任」が 19.0%（4 人）、「課長、主幹」が 14.3%（3 人）、「係長、主査」が 14.3%（3 人）、「経営者、代表取締役」が 4.8%（1 人）となっている。

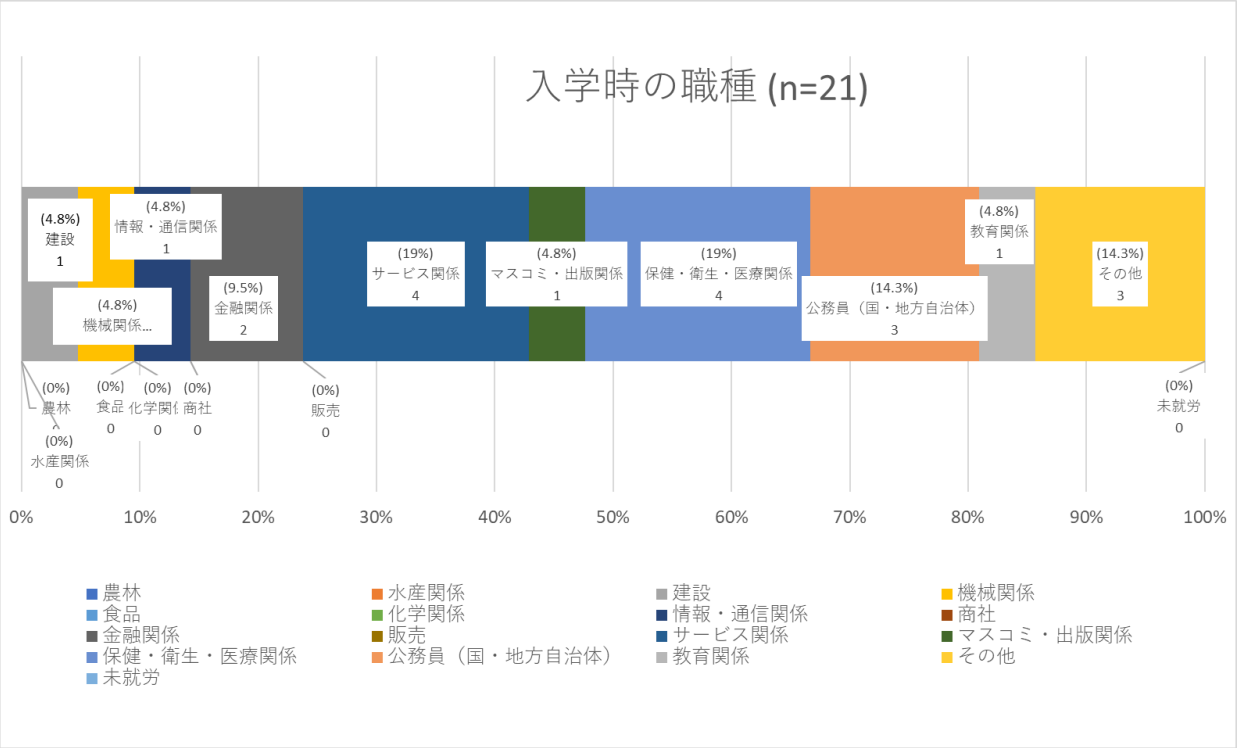
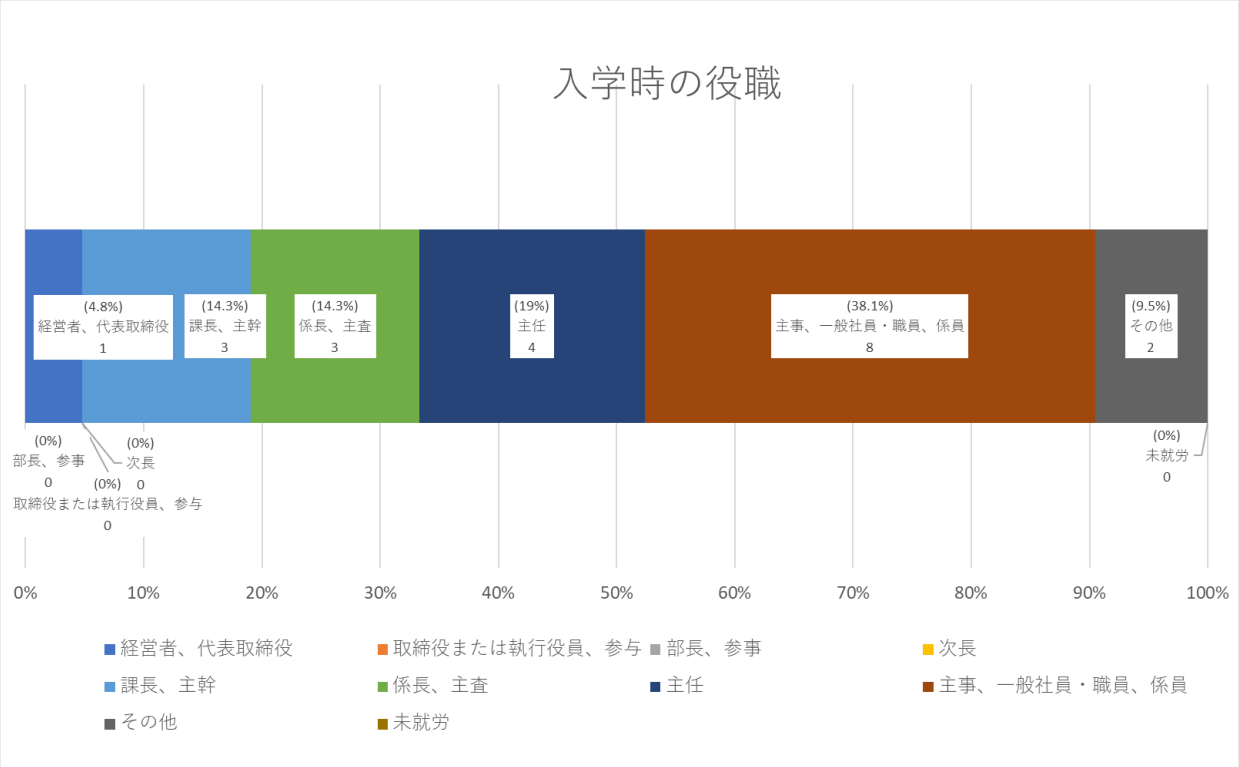


図 2. 入学時の職種について



入学時の役職について

（４） 現在の就業状況、職種、役職について（質問 50､51､52）

問 50 は本研究科の修了生が現在就業状況を問うたものである。正規雇用が 81.1%（17 人）、非正規雇用が 9.5%（2 人）、働いていないは 9.5%（2 人）である。

職種は、保健・衛生・医療関係 20.0%（4 人）で最も多く、次いで、公務員（国・地方自治体）15.0%（3 人）、金融関係 10.0%（2 人）、サービス関係 10.0%（2 人）で半数以上を占める(図 3)。

役職は、「主事、一般社員・職員、係員」が 33.3%（7 人）で最も多く、次いで「課長、主幹」が 19.0%(4 人)、「係長、主査」が 14.3%（3 人）、「主任」「その他」が 9.5%（2 人）、「経営者、代表取締役」が 4.8%（1 人）となっている。

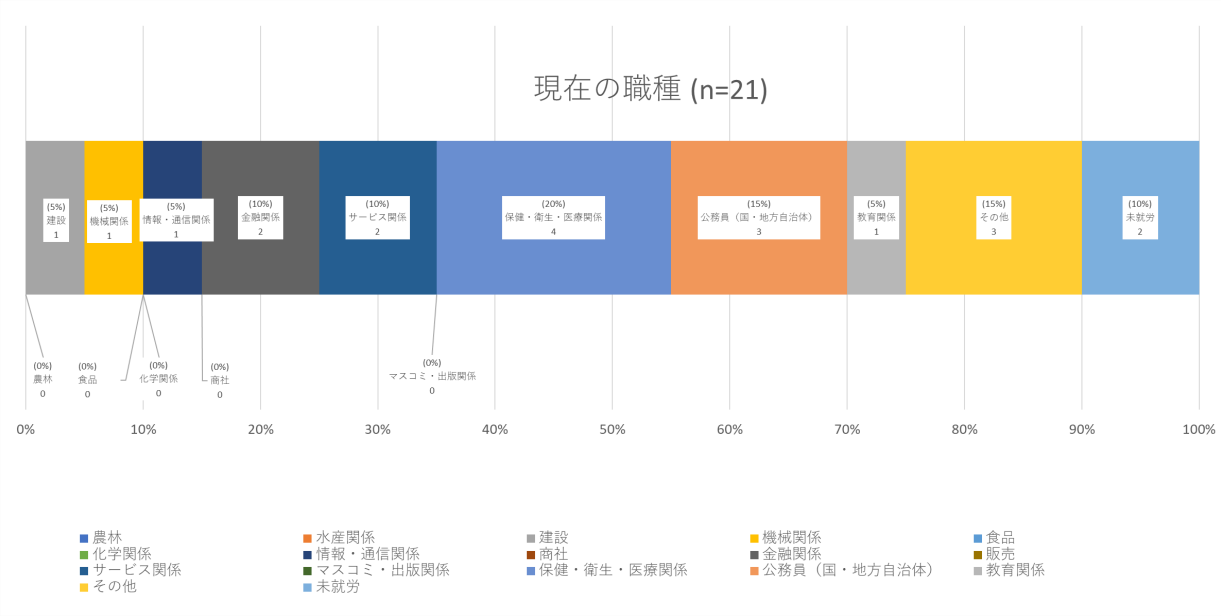
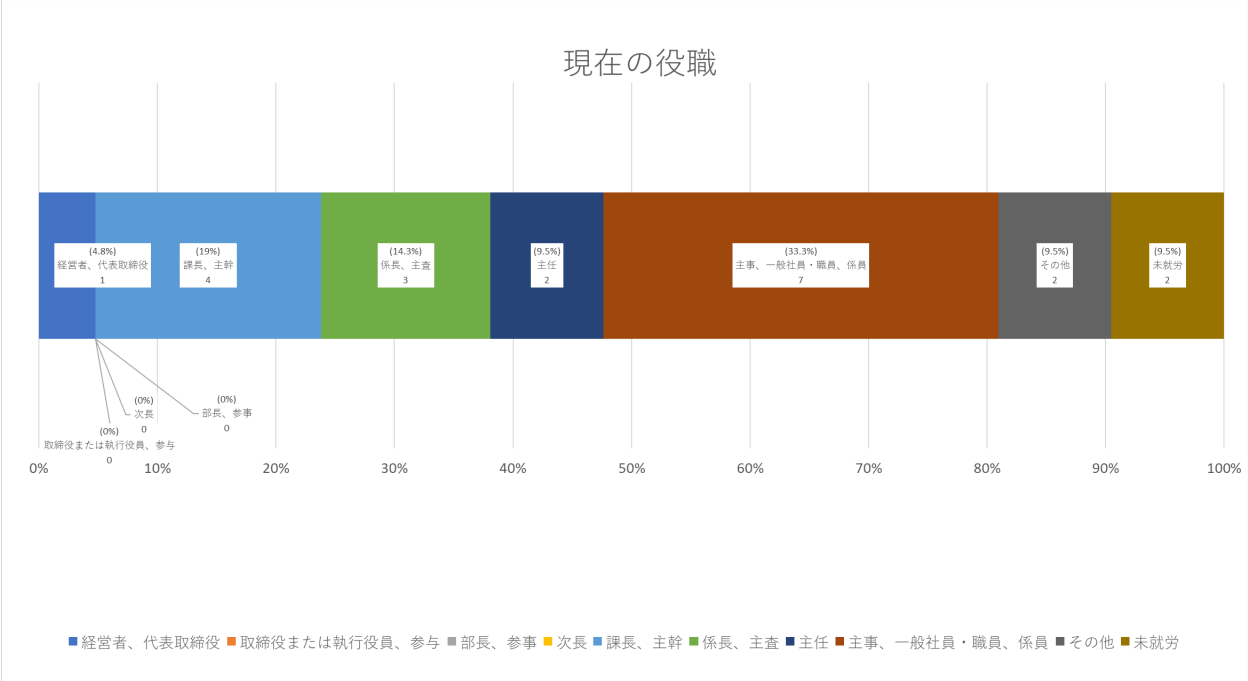


図 3．現在の職種について



在学当時の状況について

（１） 在学中の出席状況について（質問 12）

在学中にどれだけ出席できたかを見てみる。全ての授業に出席した場合を 100%とし回答してもらったところ、90%以上とした回答は 76.2%（16 人）であった。階級値を用いた平均値は 94.5%となり、前回アンケート調査（令和 3 年度修了生対象）での平均値 93.3%と比べて、若干高くなっている。

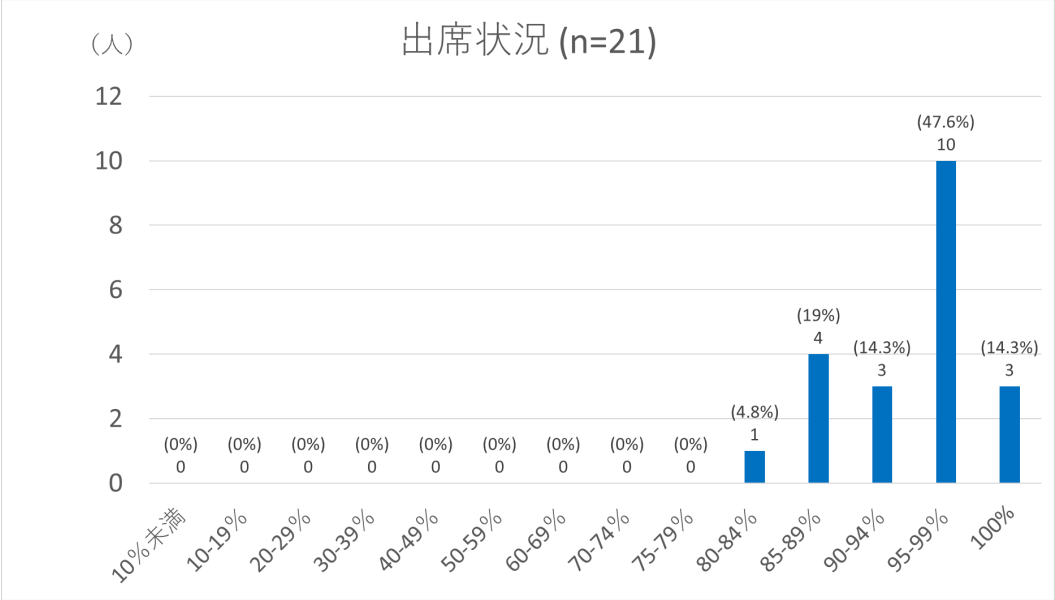


図 4. 在学中の出席状況

（２） 在学中の勉強時間（質問 13）

在学中の 1 週間あたり勉強時間は「11-15 時間」とする回答が 28.6%（6 人）と最も多い（図 5）。階級値を用いた平均値は 14.1 時間となっている（「31 時間以上」の階級値は 31 時間とした）。前回アンケート調査（令和 3 年度修了生対象）での平均値は 17.5 時間と比べて低くなっている。

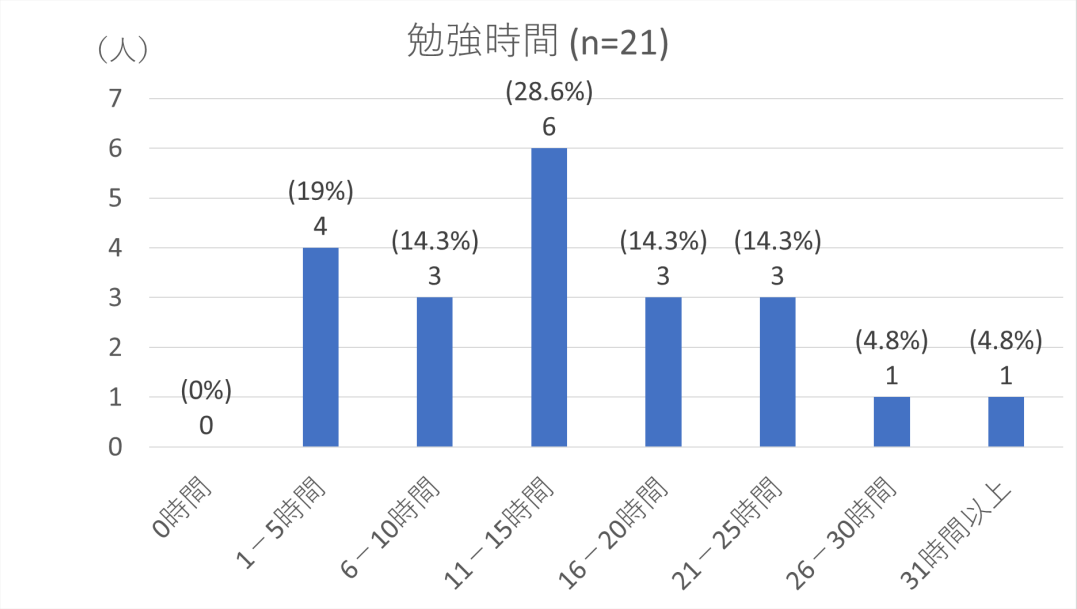


図 5. 在学中の勉強時間

授業時間以外の勉強時間の確保（自由記述）

仕事が終わった夜の時間、日中の仕事の合間の時間を確保した
夜、寝る前の 2 時間程度。土日のうちどちらか丸 1 日。
職場でのイベントに参加しない。睡眠時間を削る
睡眠時間を削ったり休日の時間を利用したりして確保しました
他に費やす時間の圧縮
睡眠時間を削減など
睡眠時間、家族との時間を削る。　または有給休暇を利用した。
朝早起きして、時間を確保
仕事終わりの時間を充てた
朝 4 時から勉強をしていた
睡眠時間、余暇の時間を削る
予め時間を確保した。
終業後と土日
休日
家族の理解
平日の授業が始まる前等に勉強する時間を設けていた
休日返上
睡眠時間および自分の自由時間、休みを勉強に当てた。
夜間と休日
日本語の勉強も含めた

（３） 仕事で役立ったと思う科目（質問 14）

仕事に役立ったと思う科目を最大 3 つまで回答してもらい、科目毎に回答数を集計した結果を表 1 に示している（割合は回答者数に対する比率）。

表 1. 仕事の上で役立ったと思う科目

仕事の上で役立ったと思う科目		
プロジェクト演習・研究	9	(42.9%)
組織行動論	5	(23.8%)
クリティカル・シンキング	5	(23.8%)
定性的研究方法論	4	(19%)
地域マネジメント論	3	(14.3%)
統計分析	3	(14.3%)
経営戦略	3	(14.3%)

ファイナンス・マネジメント	2	(9.5%)
人的資源管理論	2	(9.5%)
マーケティング戦略	2	(9.5%)
経営管理論	2	(9.5%)
意思決定分析	2	(9.5%)
四国経済事情（地域活性化と地域資源）	2	(9.5%)
アカウンティング	1	(4.8%)
サービス・マネジメント	1	(4.8%)
中小企業ファイナンスと事業承継	1	(4.8%)
経済分析	1	(4.8%)
四国経済事情（地域活性化と企業経営）	1	(4.8%)
都市・環境政策の経済評価	1	(4.8%)
費用便益分析	1	(4.8%)
観光地マネジメント	1	(4.8%)
四国経済事情（地域活性化と地域政策）	1	(4.8%)
研究倫理	1	(4.8%)
自治体財政政策	1	(4.8%)
デザイン・マネジメント	1	(4.8%)
技術経営・イノベーション特論	1	(4.8%)

（４） 仕事とは関係ないが、役立ったと思う科目（質問 15）

仕事とは関係ないが、役立ったと思う科目を最大 3 つまで回答してもらい、科目毎に回答数を集計した結果を表 2 に示している（割合は回答者数に対する比率）。

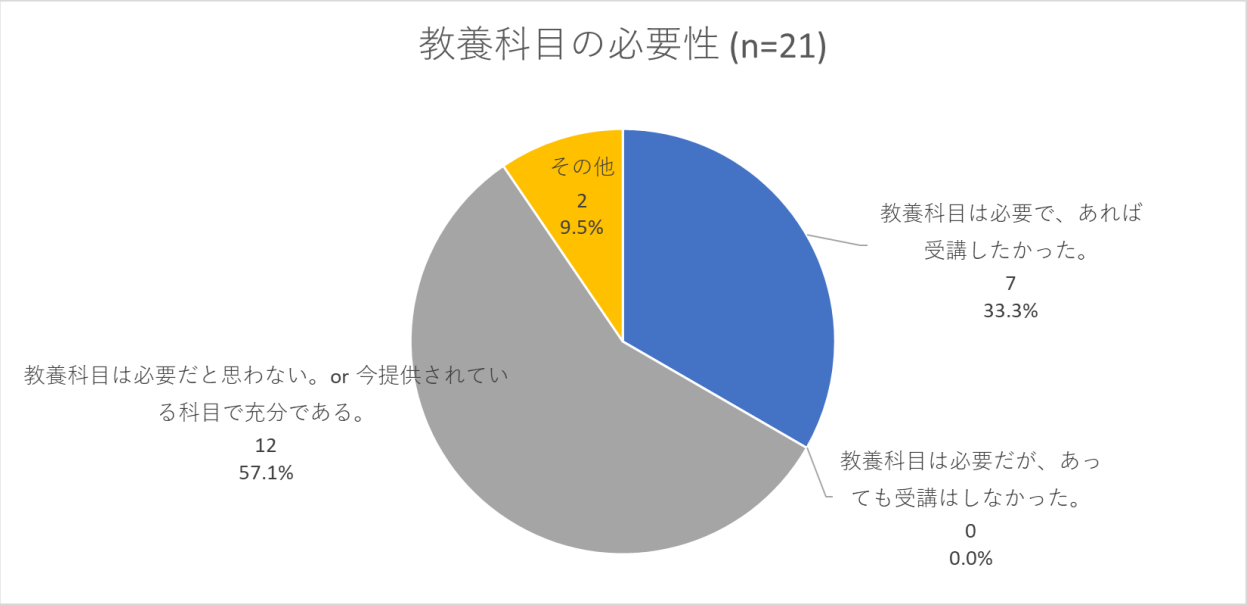
表 2．仕事とは関係なく役立ったと思う科目

仕事とは関係なく役立ったと思う科目		
マーケティング戦略	8	(38.1%)
クリティカル・シンキング	7	(33.3%)
定性的研究方法論	6	(28.6%)
ファイナンス・マネジメント	5	(23.8%)
デザイン・マネジメント	4	(19%)
組織行動論	4	(19%)
人的資源管理論	4	(19%)
地域マネジメント論	2	(9.5%)
四国経済事情（地域活性化と企業経営）	2	(9.5%)
意思決定分析	2	(9.5%)
四国経済事情（地域活性化と地域政策）	2	(9.5%)

事業構想論	2	(9.5%)
四国経済事情（地域活性化と地域資源）	2	(9.5%)
マーケティング・リサーチ	1	(4.8%)
費用便益分析	1	(4.8%)
経営戦略	1	(4.8%)
ライフアントレプレナーシップ	1	(4.8%)
経営管理論	1	(4.8%)
クリエイティビティと地域活性化	1	(4.8%)
実践型クリエイティブワーク演習	1	(4.8%)

（５） 教養科目の必要性（質問 16）

教養科目の必要性について問う設問では、「教養科目は必要だと思わない。or 今提供されている科目で十分である。」とする回答が 57.1%（12 人）と最も多いのに対し、「教養科目は必要で、あれば受講したかった。」とする回答は 33.3%（7 人）となっている。



必要と思う教養科目（自由記述）
哲学
分からないが必要と思った
語学
実際の地域課題を解決するような実習を交えたもの、実際の企業での実践型演習など
外国語
数学

（６） 土曜日の開講について（質問 17）

本研究科は社会人学生が多いため土曜日開講を行っており、土曜日開講についても質問を用意している。土曜日開講を「必要」とする回答が 71.4%（15 人）、「ある程度必要」とする回答が 19.0%（4 人）で、合わせて 90.4%（19 人）となっている。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では、「必要」が 66.7%、「ある程度必要」が 26.7%の合計 93.3%であった。

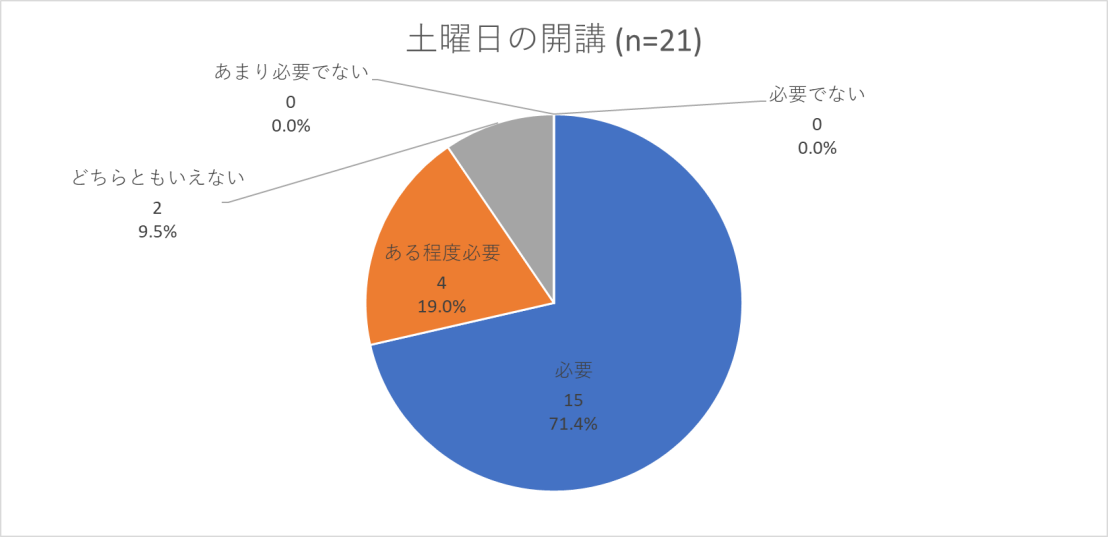
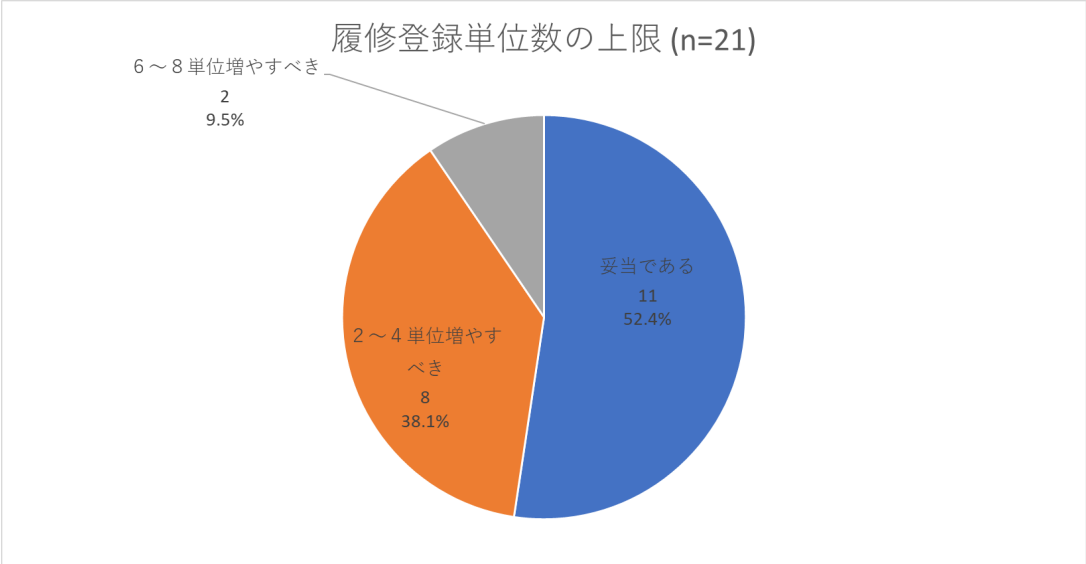


図 6. 土曜日の開講について

（７） 履修登録単位数の上限について（質問 18）

現在の履修登録単位数の上限に関する設問では、「妥当である」とする回答が 52.4%（11 人）と最も多い。次いで、「2~4 単位増やすべき」が 38.1%（8 人）、「6~8 単位増やすべき」が 9.5%（2 人）となっている。



（８） プロジェクト研究について（質問 19、20、20-2）

本研究科のカリキュラムの集大成となるプロジェクト研究について見てみると、肯定的な回答が 85.7%（18 人）であった（「満足している」が 38.1%（16 人）、「ある程度満足している」が 47.6%(10 人)。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では、「満足している」が 53.3%、

「ある程度満足している」が 33.3%で合計 86.6%である。

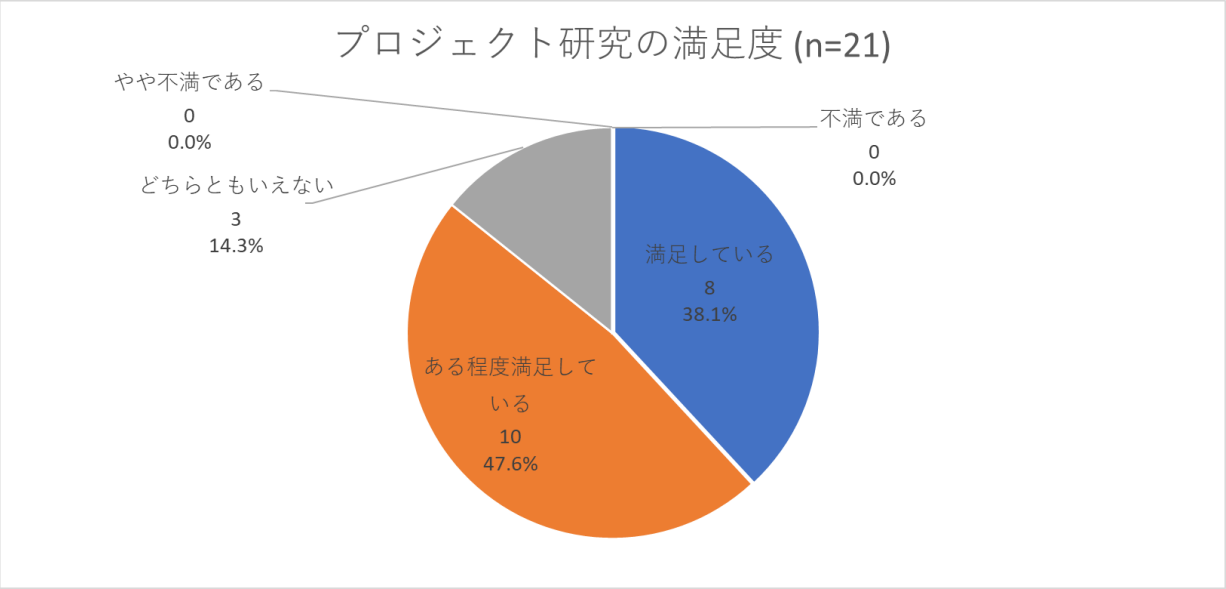


図 7. プロジェクト研究について

また、プロジェクト研究担当教員以外の指導については、「助言・指導は受けなかった」とする回答が 52.4%（11 人）と最も多く、次いで「充分な助言・指導を受けた」と、「充分とはいえないが、助言・指導を受けた」との回答がどちらも 23.8%（5 人）となっている。助言・指導を受けた人物は本研究科の教員が最も多い（助言・指導を受けた者のうち 90.0%（9 人）が本研究科教員を助言・指導者として挙げている）。

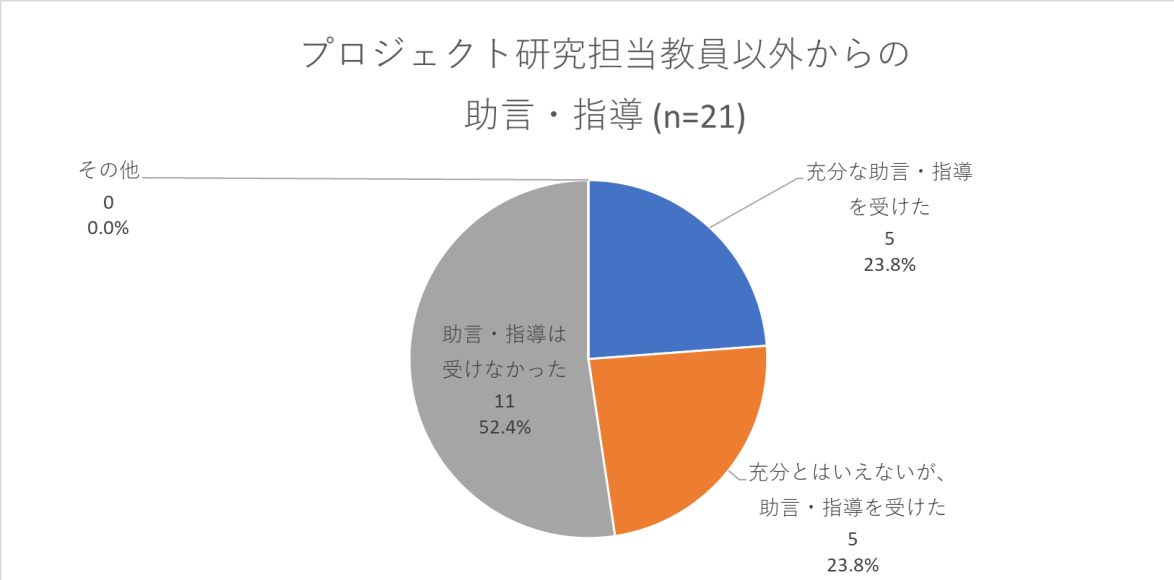
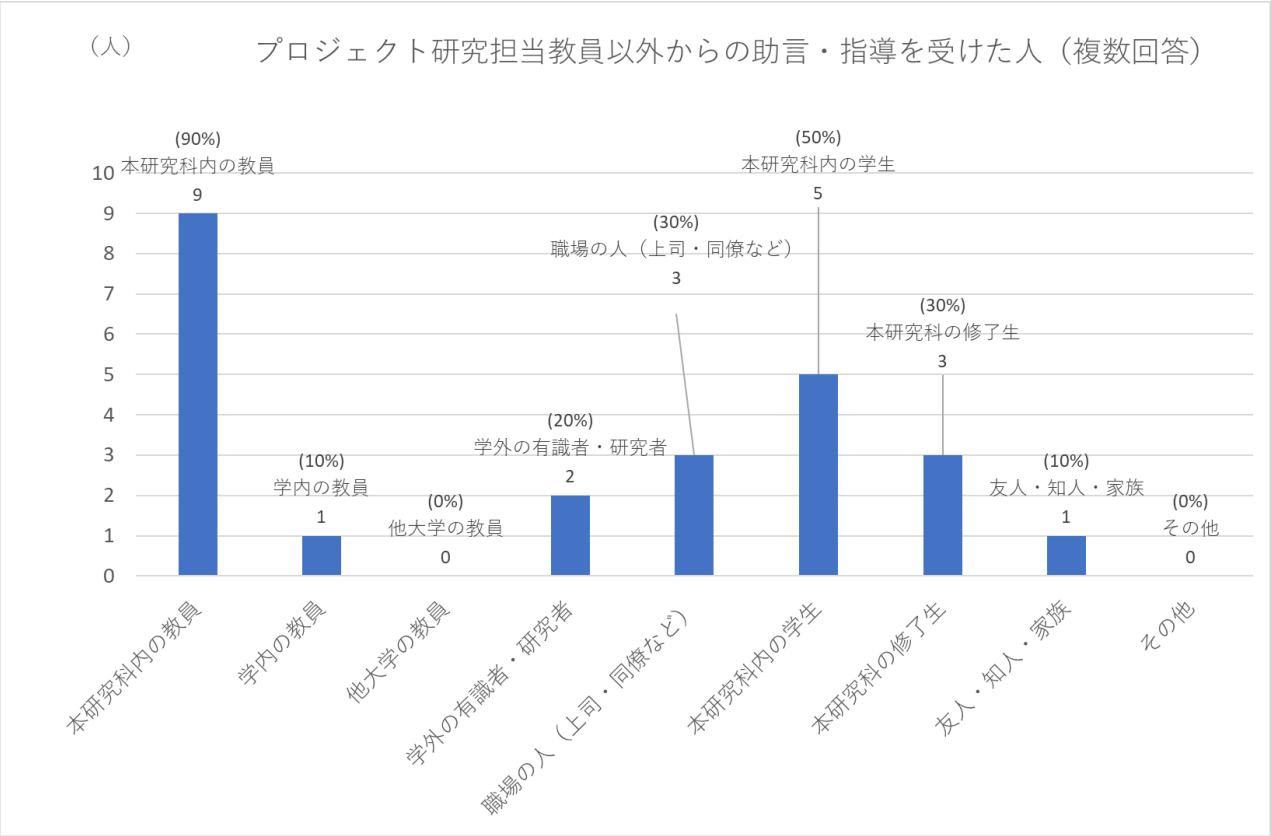


図 8. プロジェクト研究における指導教員以外からの指導について

プロジェクト研究担当教員以外からの助言・指導の回答理由
特に相談したいと思わなかった 特に必要を感じなかったことと、ほぼ登校しなかったため。 研究対象に関するより専門的な助言を受けるため。 また、研究のスケジュール感を聞くため。 理解を得たうえで助言をもらうには、時間がなかったこと

テーマ選択や研究の方向性など
指導教員以外の方向性を取り入れる事と研究の幅が広がりすぎると考えたため（時間的制約)。また、先生との関係を配慮した。
担当教授がよくしてくださったため
1 年次にアカデミックアドバイザーとして指導を受けました。
SPSS の活用方法について、詳細にご質問するため
指導教員が適切な指導をしてくれたから
質問に行かなかったが、時間を取ってもっと行くべきだった
話の流れで相談する形になった
該当する教員の不在
専門、もしくは違う視点からの意見を求めて。
担当教員の指導に納得していたためと、他のどの教員に助言を仰げばよいかあまりわかっていなかったため
詳しい方を紹介してくれました。



（９） 自習室、教室の環境について（質問 21､22）

教室環境の満足度について、肯定的な回答は 95.2%（20 人）である（「満足している」が 52.4%（11 人)、「ある程度満足している」が 42.9%（9 人))。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では肯定的な回答が 100%（「満足している」が 46.7%「ある程度満足している」が 53.3%）であり、低くなっている。

自習室環境の満足度について、肯定的な回答は 76.2%(16 人)である(「満足している」が 52.4%(11 人)、「ある程度満足している」が 23.8%(5 人))。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では肯定的な回答が 83.3%(「満足している」が 53.3%、「ある程度満足している」が 30.0%)であり、低くなっている。

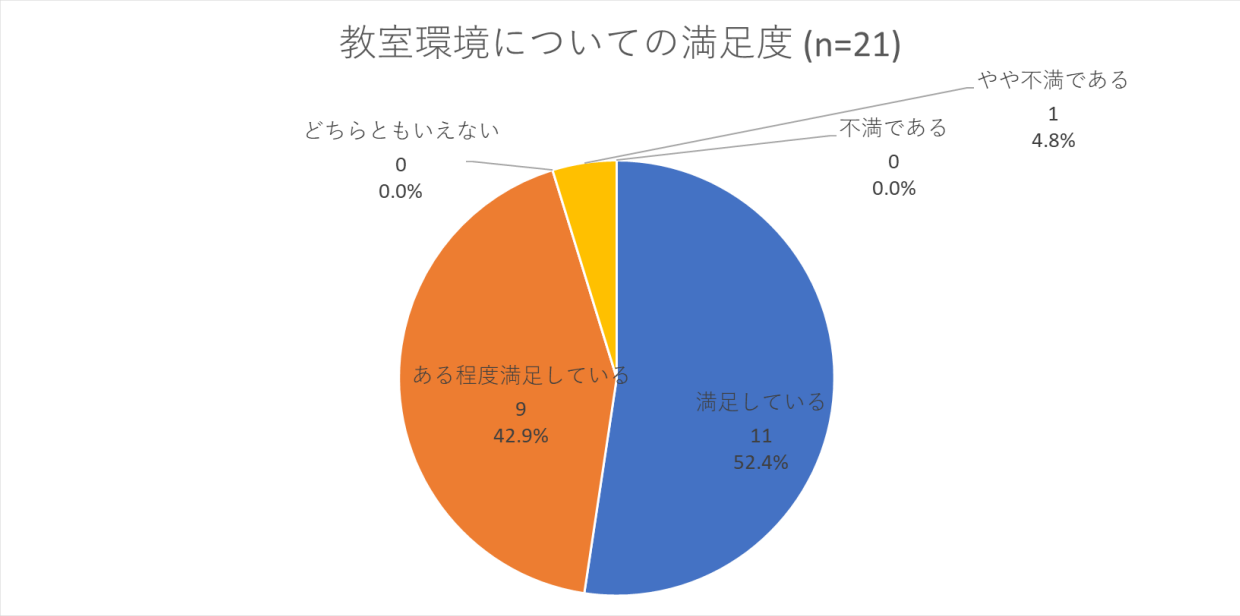
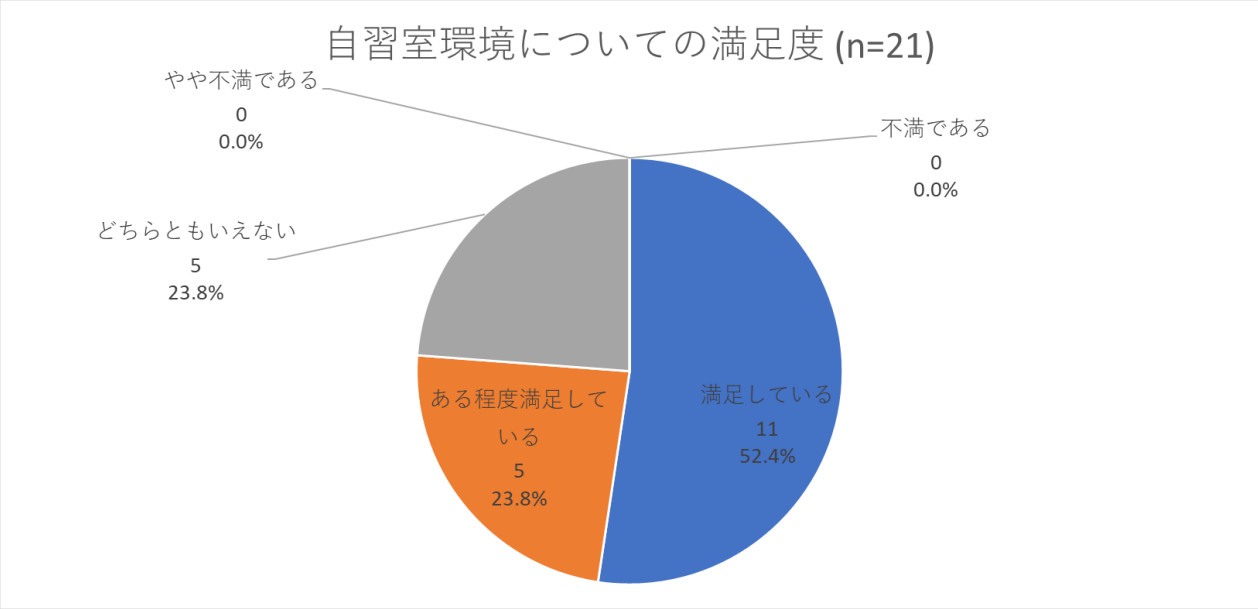


図 9. 学校の環境について



（１０） 本研究科 PC ルームの利用状況について（質問 23、24、25）

本研究科 PC ルームの利用状況については、「ほとんど利用しなかった」とする回答が 42.9%(9 人)と最も多く、次いで、「1 週間に 1 回以上」が 23.8%(5 人)、「1 ヶ月に 2～3 回程度」と、「イベントやプロジェクト研究等で特定の時期のみに集中的に利用」がどちらも 14.3%(3 人)、「1 ヶ月に 1 回程度」が 4.8%(1 人)となっている。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では「ほとんど利用しなかった」とする回答が 53.3%であり、それと比べると利用状況は改善している。

PC ルームを利用した 12 名に対してアプリ・機器の利用頻度をたずねた結果は図 11 に示している。

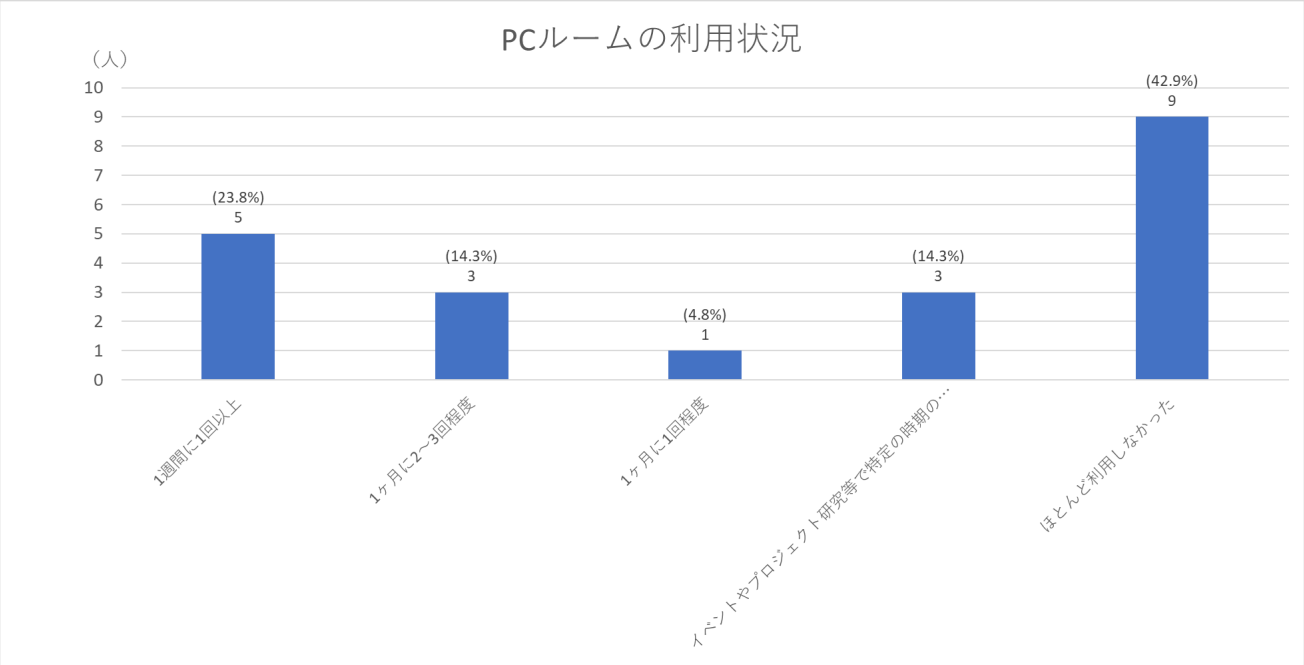


図 10．PC ルームの利用状況

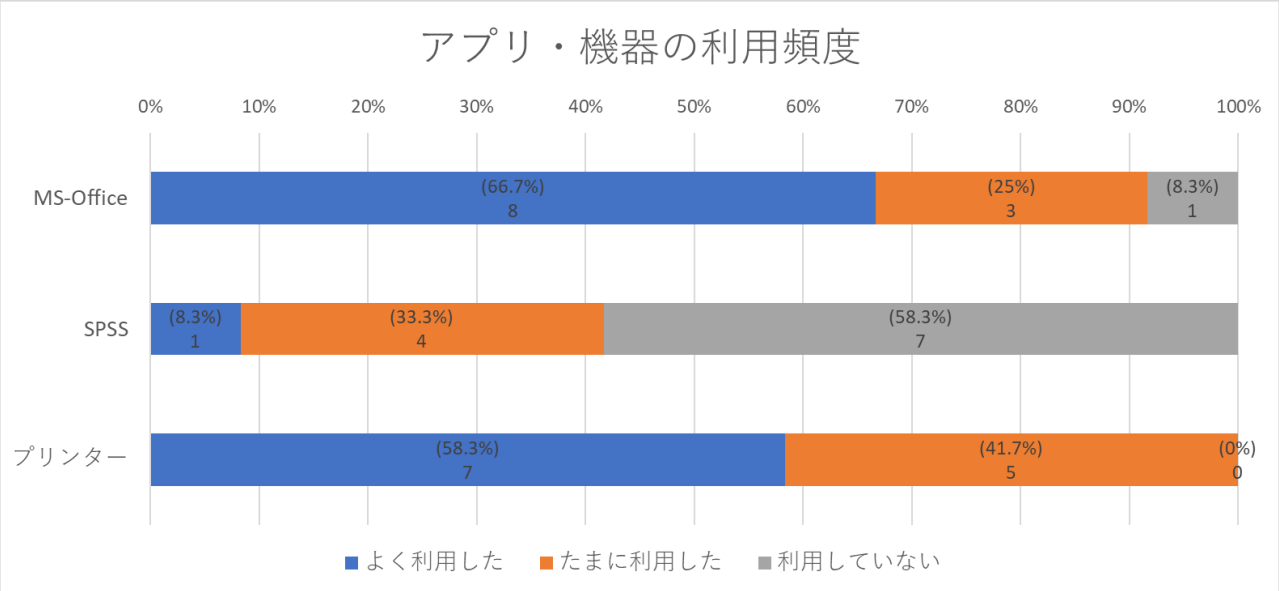


図 11．アプリ・機器の利用頻度

PC ルームに導入してほしいアプリケーション・機器（質問 25　記述）
プロジェクター
リモート用のカメラ
adobe

（１１）　　オンラインでの授業科目や受講について（質問 26､27､28）

授業の受講方法については､「授業は主に対面で受講したが、事情に応じてオンラインで受講す

ることもあった」と「授業は主に対面で受講した」がどちらも 47.6%（10 人）で最も多い。

オンラインでの受講については、「問題なくオンラインで受講できた」に対する肯定的回答は 95.2%（20 人）となっている（「そう思う」が 52.4%（11 人）、「どちらかというとそう思う」が 42.9%（9 人））。前回アンケート調査（令和 3 年度修了生対象）における肯定的回答の割合は 90.0%であり、肯定的回答の割合が高くなっている。

「オンラインで受講する力が身についた」に対する肯定的回答は 85.7%（18 人）となっている（「そう思う」が 52.4%（11 人）、「どちらかというとそう思う」が 33.3%（7 人））。前回アンケート調査（令和 3 年度修了生対象）における肯定的回答の割合は 90.0%であり、肯定的回答の割合は低下している。

「オンラインの授業におおかた満足している」に対する肯定的回答は 90.5%（11 人）となっている（「そう思う」が 47.6%（10 人）、「どちらかというとそう思う」が 42.9%（9 人））。前回アンケート調査（令和 3 年度修了生対象）における肯定的回答の割合は 83.3%であり、肯定的回答の割合が高くなっている。

「コロナ感染症が終息した後もオンラインの授業は必要である」に対する肯定的回答は 71.4%（15 人）となっている（「そう思う」が 23.8%（5 人）、「どちらかというとそう思う」が 47.6%（10 人））。前回アンケート調査（令和 3 年度修了生対象）における肯定的回答の割合は 76.7%であり、肯定的回答の割合は低下している。

「本研究科の授業は対面で受講する方がよい」に対する肯定的回答は 76.2%（16 人）となっている（「そう思う」が 61.9%（13 人）、「どちらかというとそう思う」が 14.3%（3 人））。前回アンケート調査（令和 3 年度修了生対象）における肯定的回答の割合は 73.3%であり、肯定的回答の割合が高くなっている。

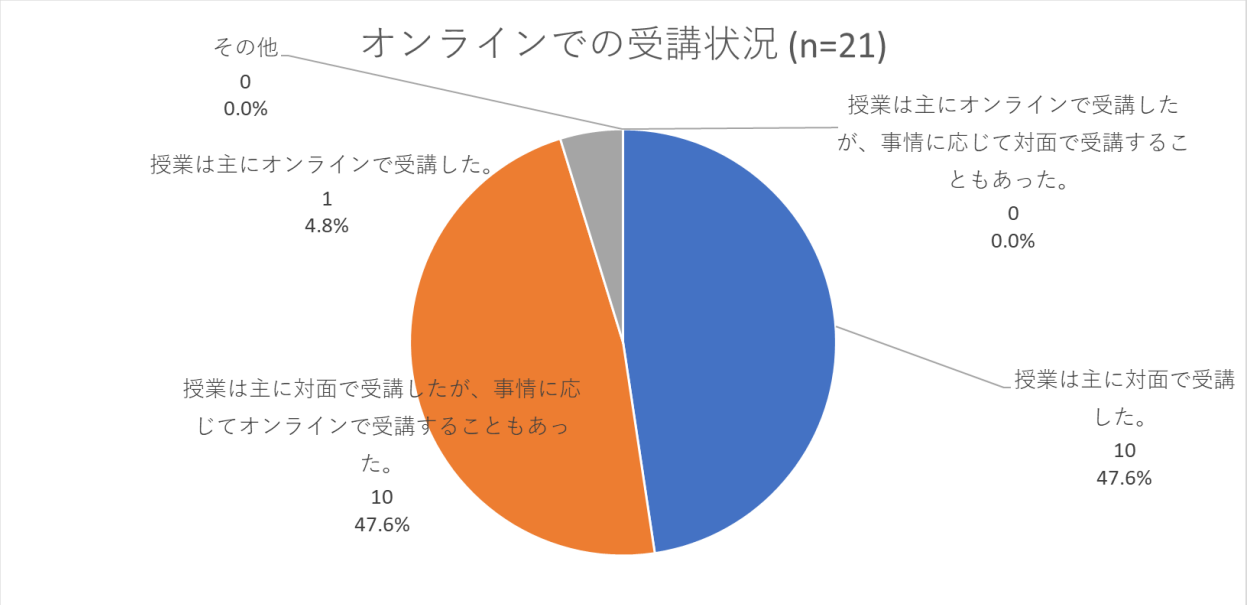


図 13．授業の受講方法

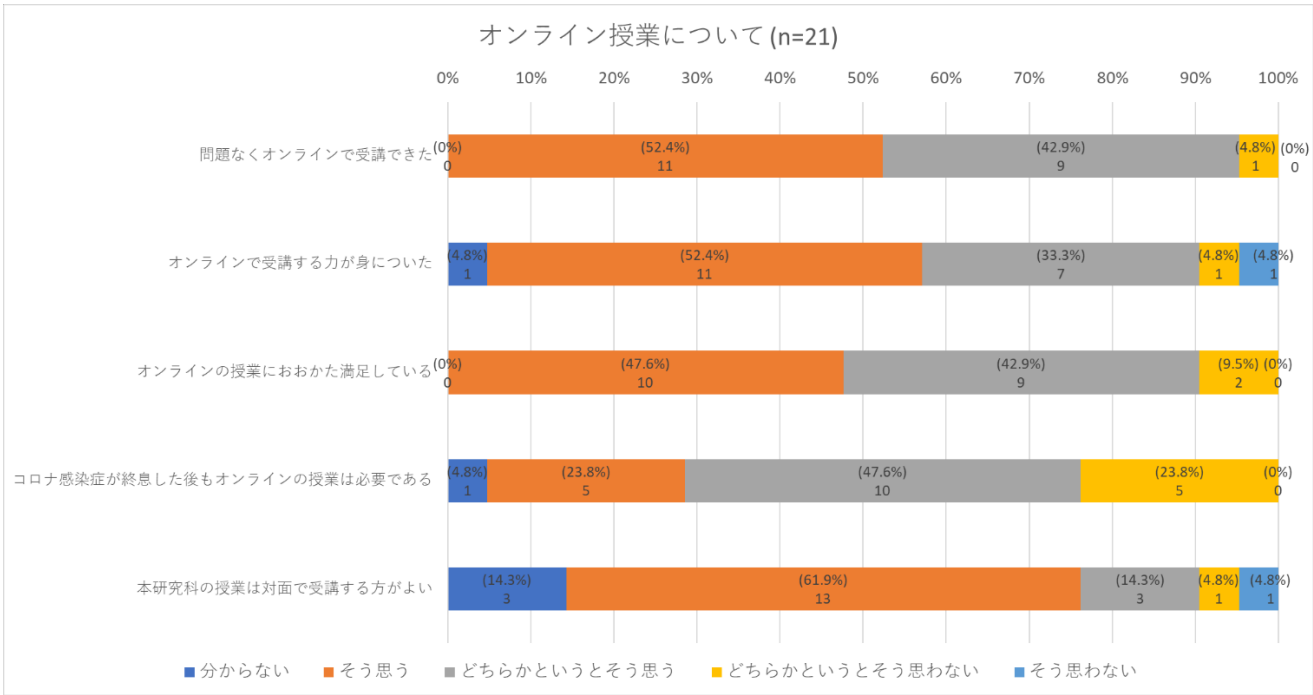


図 14．オンライン授業について

オンラインの授業科目や受講について（自由記述）
・社会人であるため出張や残業があったり、県内であっても遠方から通学する者もいるので、講義系の科目はオンライン（オンデマンドや e ラーニング含む）があればいいと思う。ただしグループワーク等の授業に関してハイフレックスで実施すると対面参加者もオンライン参加者もストレスになるので、回によって対面のみオンラインのみとするのが良いと感じた。 ・オンライン授業時、特にハイブリッドの際の音声を会場音ではなく、直接マイクからの出力にしないと聞き取りにくい。 ・オンラインは気楽ですし、授業の内容によってはオンラインでも支障がないものがあると思います。また、授業時間外でグループワークが必要なものは、基本的にオンラインの方が時間の自由がきいて良いと思います。ただ、ディスカッションすることが中心の授業は、対面の方が楽しいですね。 ・M1 での醍醐味はデスカッションが大切だと思うので、オンラインよりも対面がよい ・特にありません。 ・対面が望ましいが、オンラインでの柔軟な受講も認められるべきだと思う ・遠方から通う学生にとっては有用なものだと感じる。 ・ディスカッションをする科目では対面の方がよいが、講義形式ならオンラインでもよいと思う。 ・オンラインではデスカッションやグループワークは困難だった

３．　在学当時の支援関係について

（１）　社会人組織、社会人組織以外からの支援について（質問 29、29-2、30、30-2）

所属組織からの入学・勉学の支援の有無について、「受けた」とする回答は 42.9%（9 人）であった。支援内容については「学費の補助」が 77.8%（7 人）と最も多く、次いで「勤務調整」が 44.4%（4 人）となっている（割合は支援を「受けた」回答者に対する比率）。

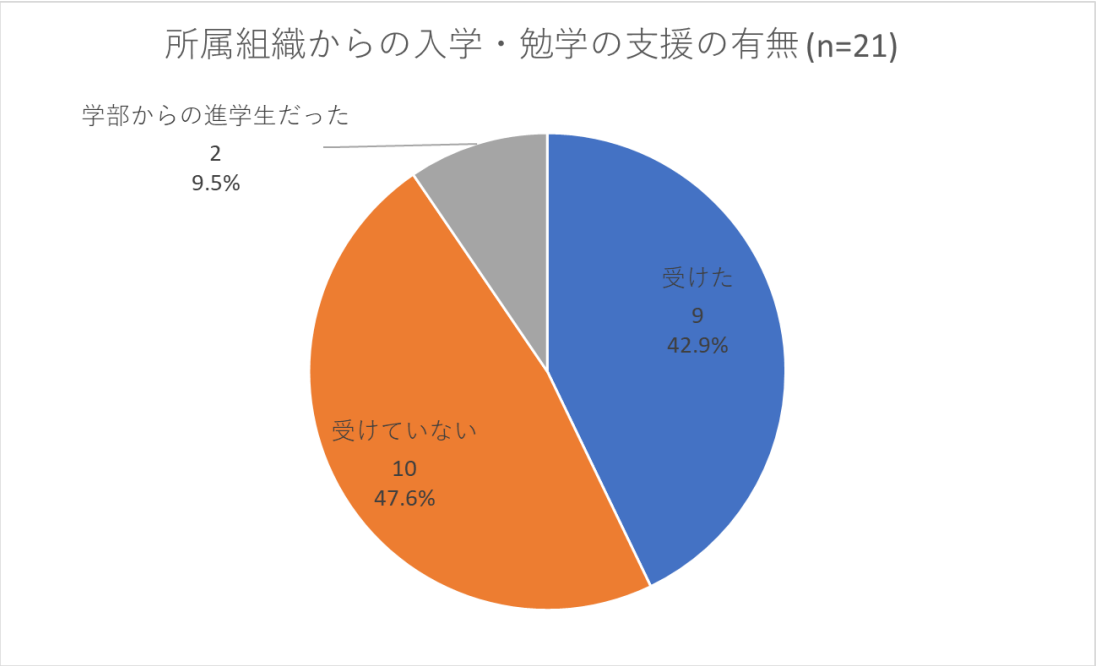
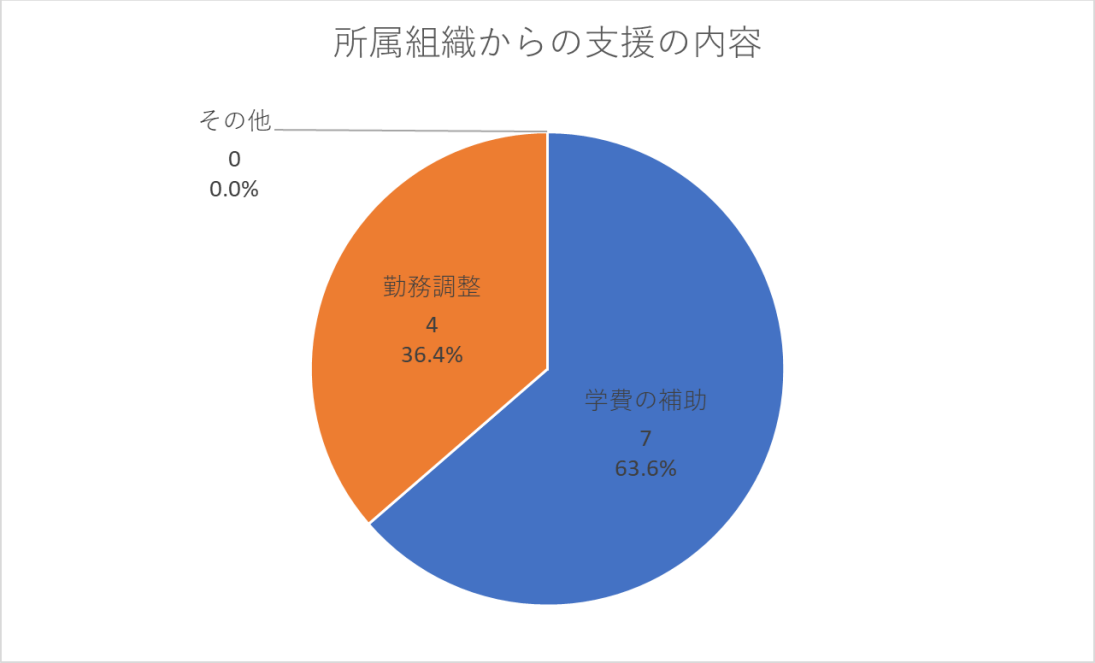
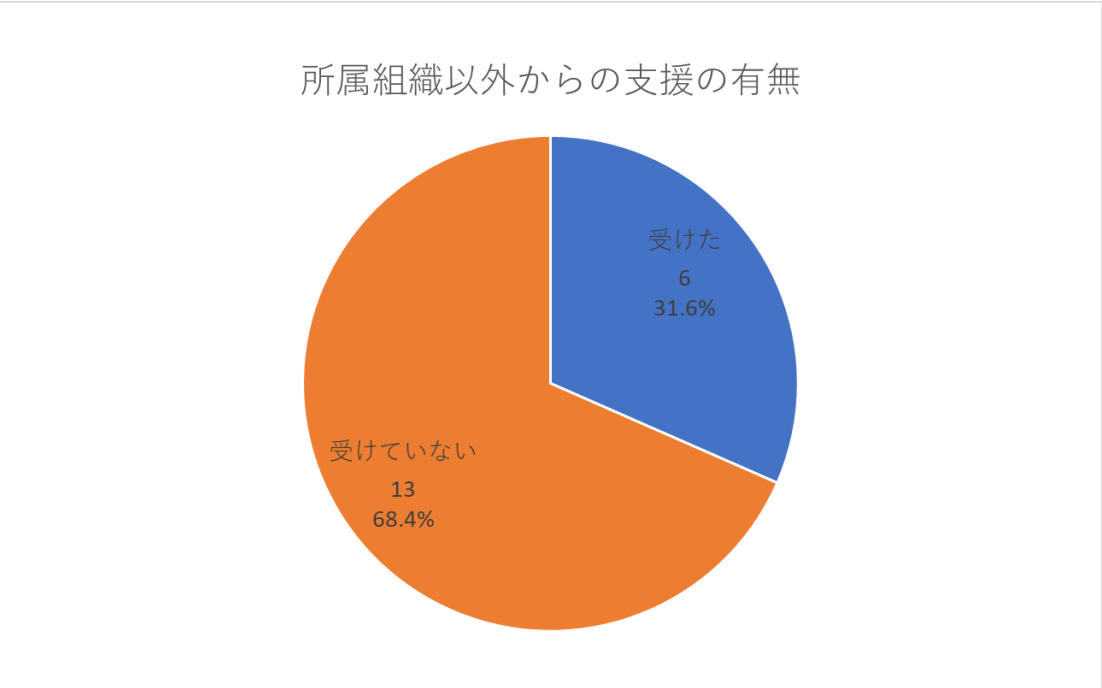
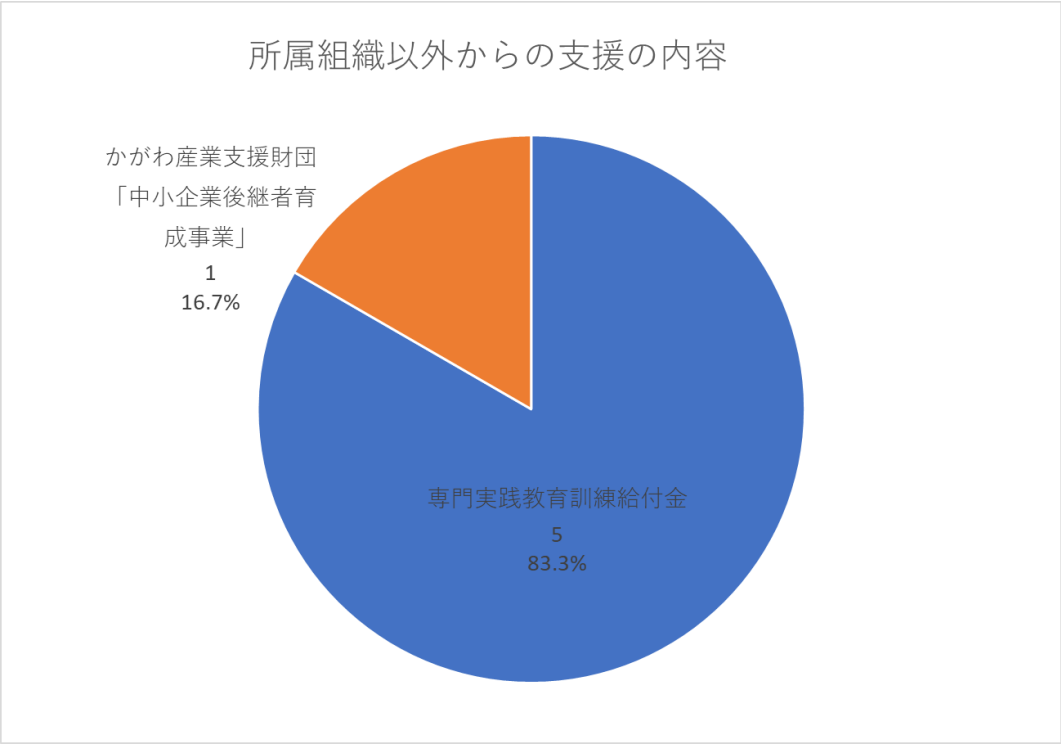


図 15.　入学・勉学支援について



所属組織以外からの支援の有無については、「受けた」とする回答は 31.6%（6 人）であった。支援内容は「専門実践教育訓練給付金」が 83.3%（5 人）と最も多く、次いで「かがわ産業支援財団『中小企業後継者育成事業』」が 16.8%（1 人）となっている（割合は支援を「受けた」回答者に対する比率）。





（２） 学部学生の就職について（質問 31）

学部からの進学生（2 名）を対象に就職支援への満足度を尋ねた設問では、「ある程度満足」とする回答が 50.0（1 人）、「不満である」とする回答が 50.0（1 人）となっている。

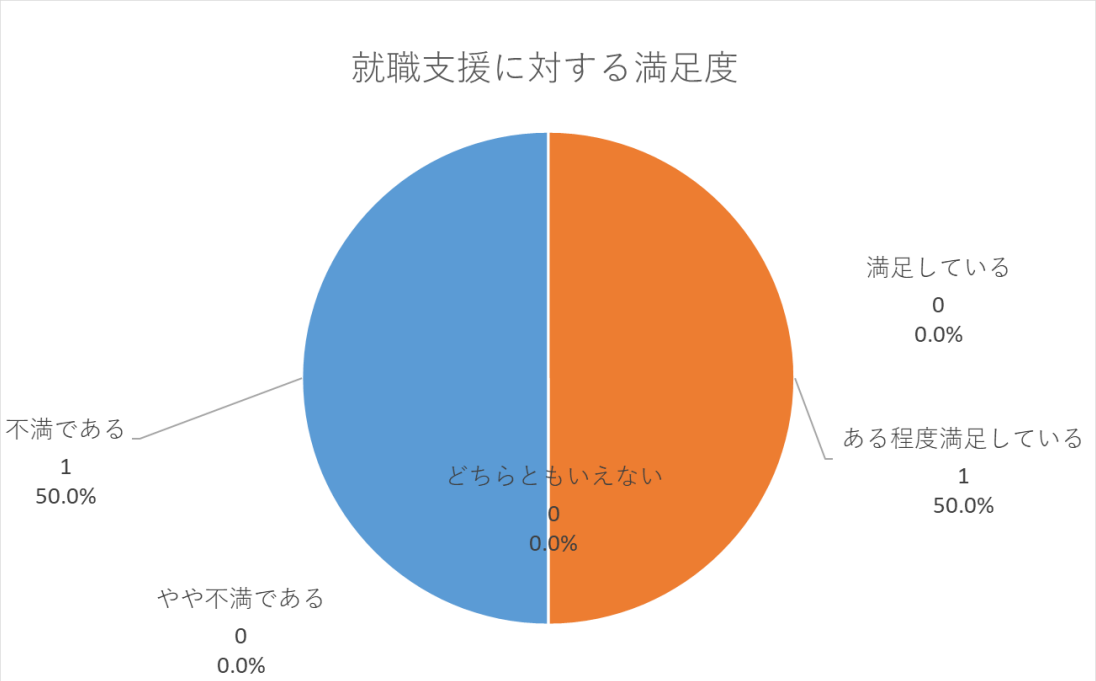


図 16. 就職支援について

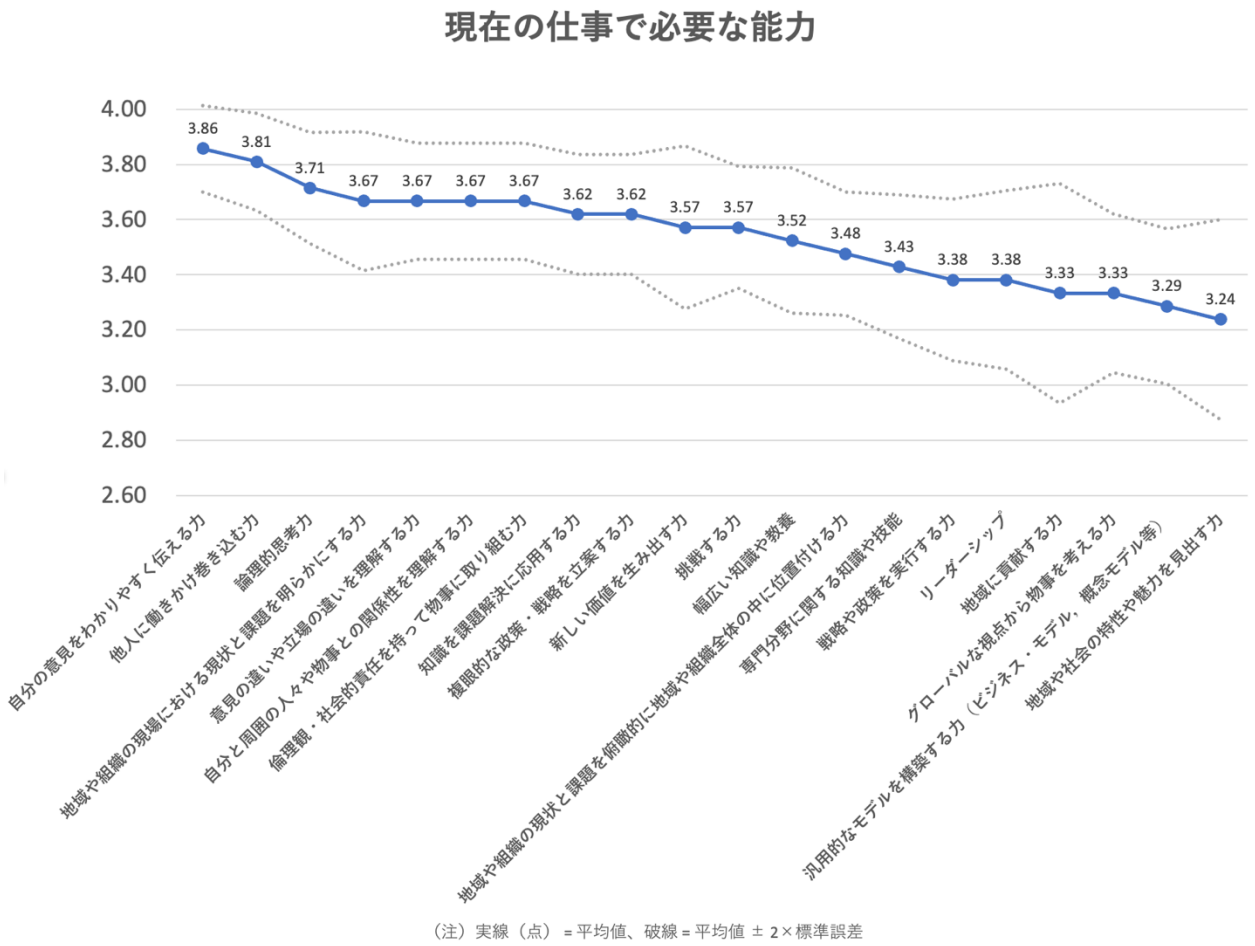
（３） 現在の仕事で必要な能力と大学院教育で身についた能力（質問 32）

20 の能力毎に、現在の仕事でどの程度必要とされているか、大学院教育でどの程度身についたかについて尋ねている。前者については、「必要」「ある程度必要」「あまり必要ない」「必要ない」の 4 段階で回答してもらう。後者については、「入学時に既に身についていた」「身についた」「ある程度身についた」「あまり身についていない」「身についていない」の 5 つの選択肢から回答してもらう。集計にあたっては、現在の仕事で必要とされる程度を 4 から 1 で評価し、大学院で身についた程度を 4 から 1 で評価している。

直近 5 年間における両者（平均点）の相関係数は次の表の通りである。

	2018 年度	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
修了生数（人）	31	18	26	34	36
回答数（人）	28	12	25	30	21
回答率（%）	90.3	66.7	96.2	88.2	58.3
相関係数	0.319	0.058	0.273	0.714	0.249

図 17. 現在の仕事で必要な能力

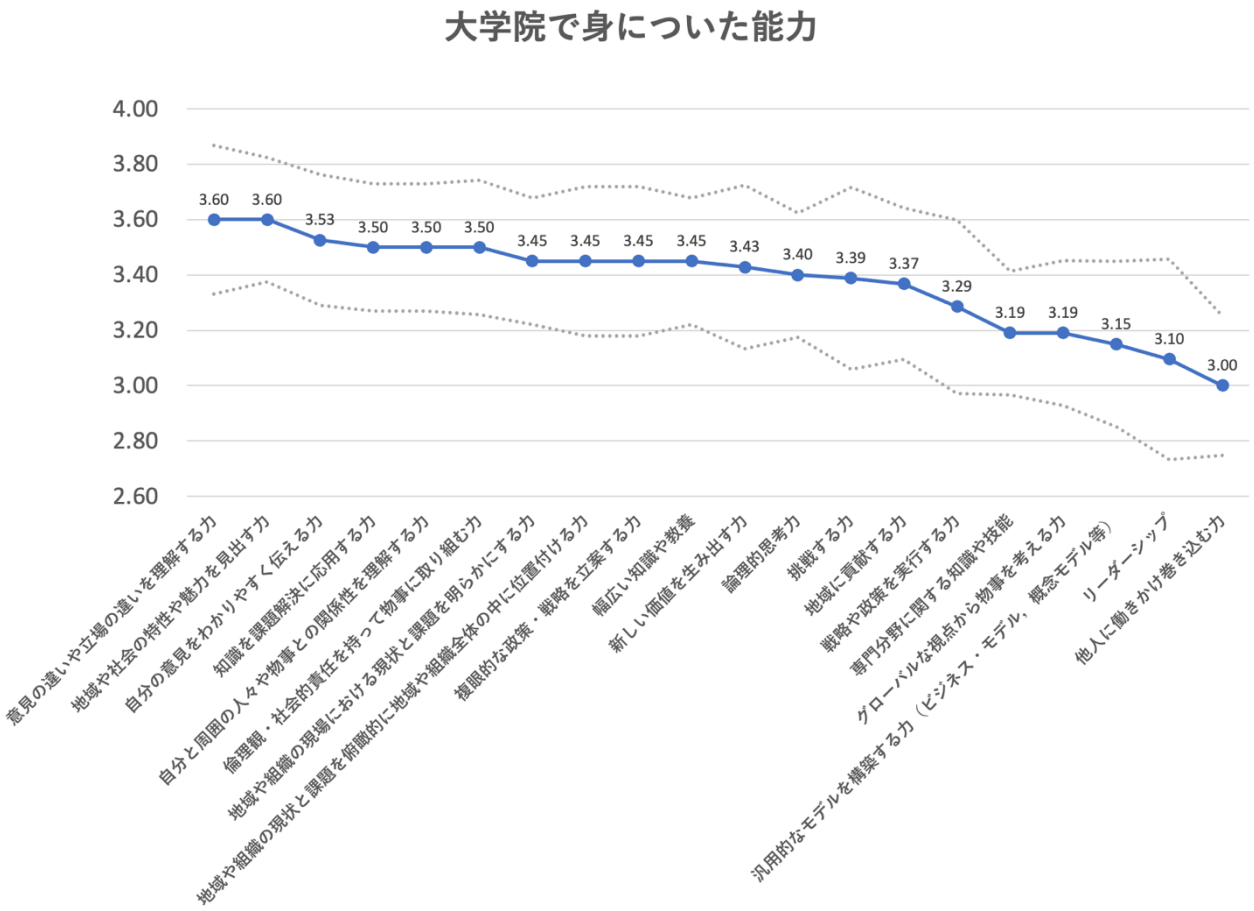


（注）実線（点）＝平均値、破線＝平均値 ± 2×標準誤差

表 3. 現在の仕事で必要な能力（平均点順）

順位	項目	平均値	標準偏差
1	自分の意見をわかりやすく伝える力	3.86	0.36
2	他人に働きかけ巻き込む力	3.81	0.40
3	論理的思考力	3.71	0.46
4	地域や組織の現場における現状と課題を明らかにする力	3.67	0.58
4	意見の違いや立場の違いを理解する力	3.67	0.48
4	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	3.67	0.48
4	倫理観・社会的責任を持って物事に取り組む力	3.67	0.48
8	知識を課題解決に応用する力	3.62	0.50
8	複眼的な政策・戦略を立案する力	3.62	0.50
10	新しい価値を生み出す力	3.57	0.68
10	挑戦する力	3.57	0.51
12	幅広い知識や教養	3.52	0.60
13	地域や組織の現状と課題を俯瞰的に地域や組織全体の中に位置付ける力	3.48	0.51
14	専門分野に関する知識や技能	3.43	0.60
15	戦略や政策を実行する力	3.38	0.67
15	リーダーシップ	3.38	0.74
17	地域に貢献する力	3.33	0.91
17	グローバルな視点から物事を考える力	3.33	0.66
19	汎用的なモデルを構築する力（ビジネス・モデル，概念モデル等）	3.29	0.64
20	地域や社会の特性や魅力を見出す力	3.24	0.83

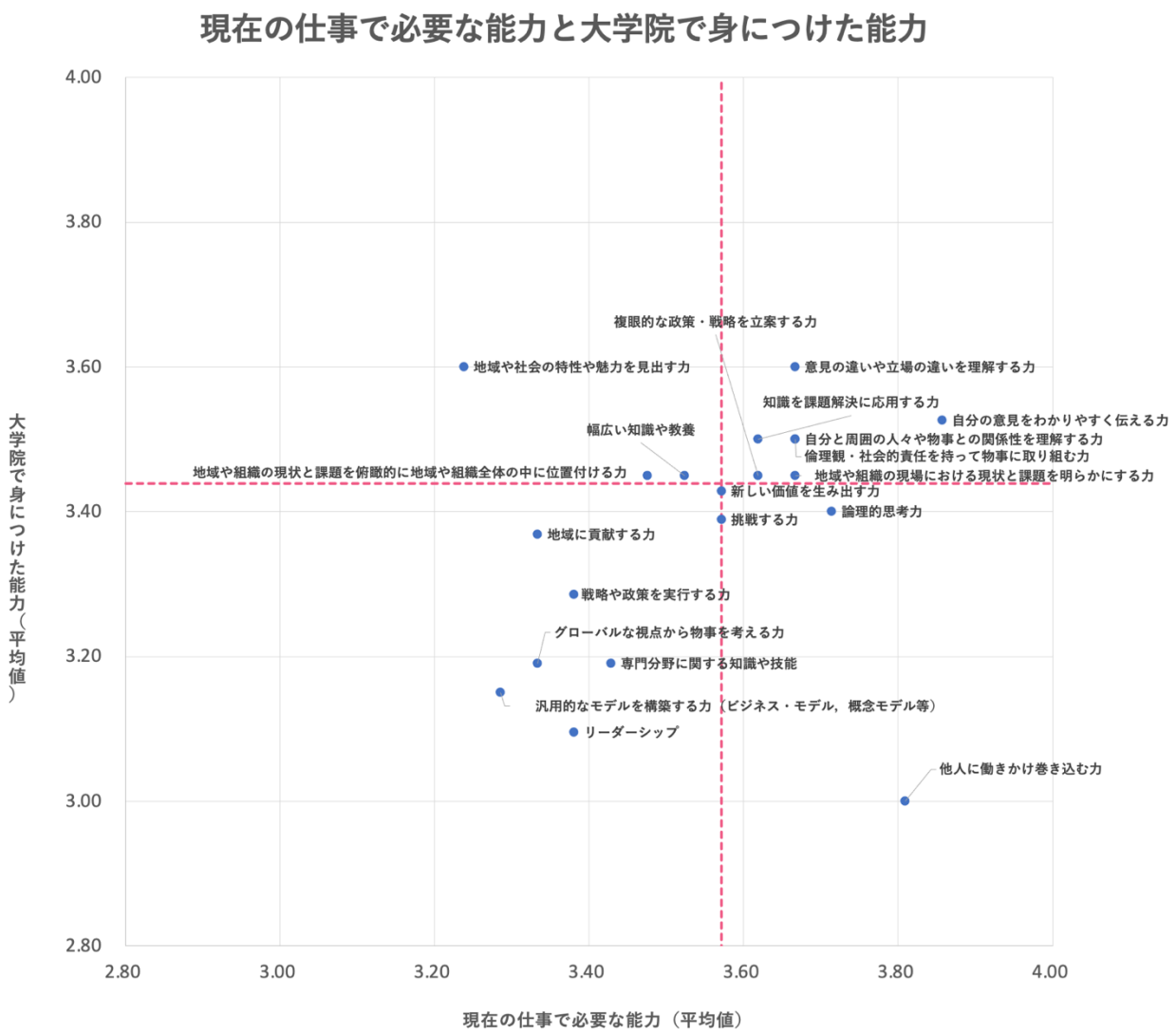
図 18. 大学院教育で身についた能力



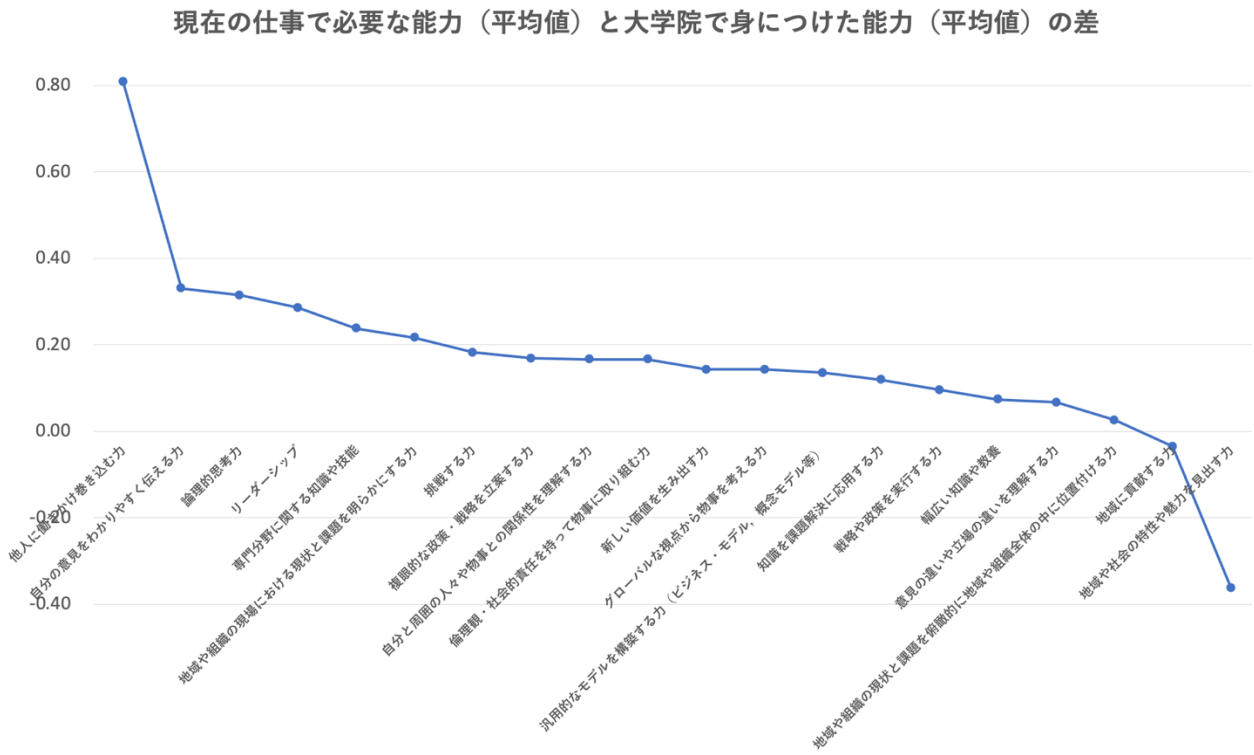
（注）実線（点）＝平均値、破線＝平均値 ± 2×標準誤差

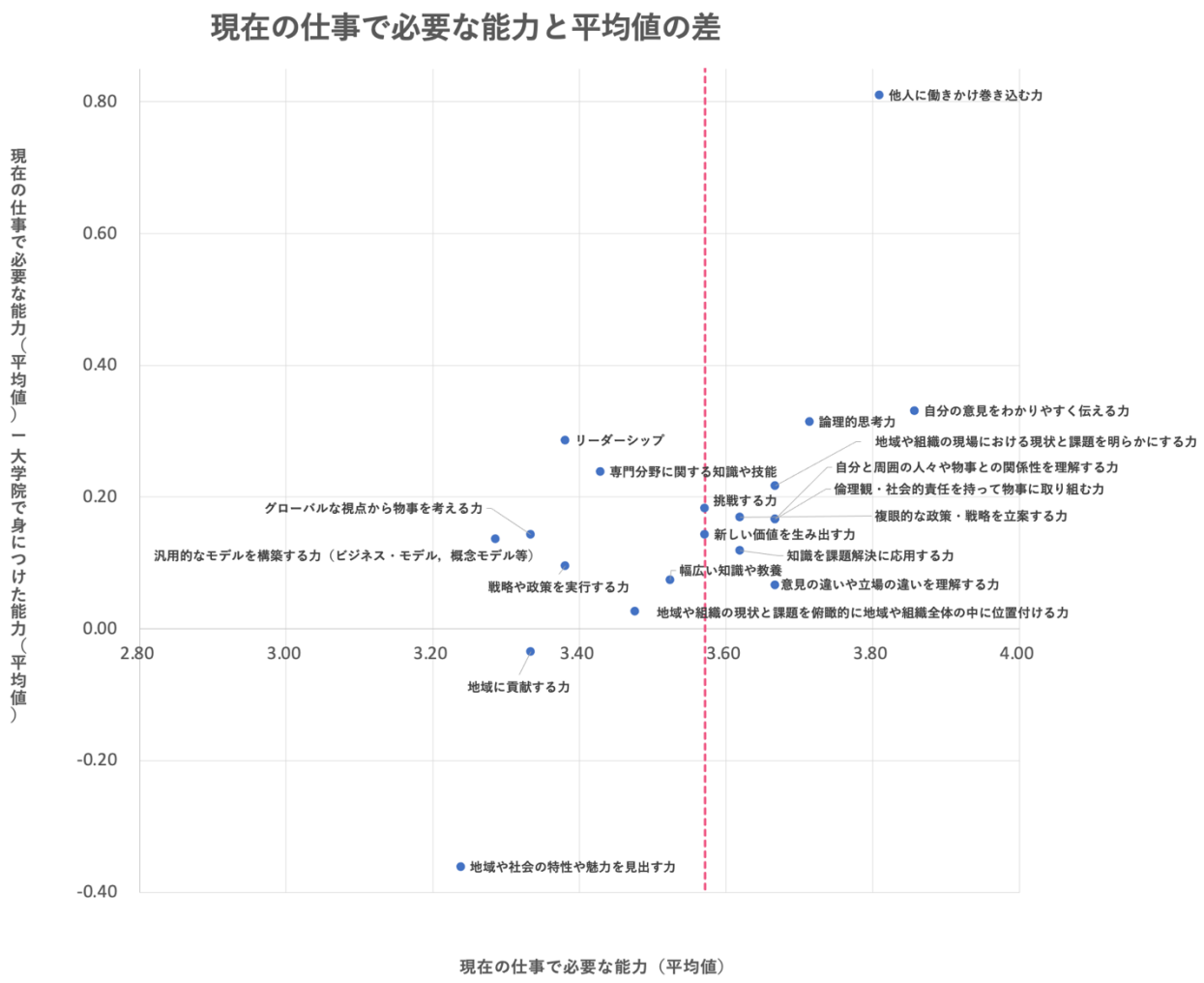
表 4. 大学院教育で身に付いた能力（平均点順）

順位	項目	平均値	標準偏差
1	意見の違いや立場の違いを理解する力	3.60	0.60
1	地域や社会の特性や魅力を見出す力	3.60	0.50
3	自分の意見をわかりやすく伝える力	3.53	0.51
4	知識を課題解決に応用する力	3.50	0.51
4	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	3.50	0.51
4	倫理観・社会的責任を持って物事に取り組む力	3.50	0.51
7	地域や組織の現場における現状と課題を明らかにする力	3.45	0.51
7	地域や組織の現状と課題を俯瞰的に地域や組織全体の中に位置付ける力	3.45	0.60
7	複眼的な政策・戦略を立案する力	3.45	0.60
7	幅広い知識や教養	3.45	0.51
11	新しい価値を生み出す力	3.43	0.68
12	論理的思考力	3.40	0.50
13	挑戦する力	3.39	0.70
14	地域に貢献する力	3.37	0.60
15	戦略や政策を実行する力	3.29	0.72
16	専門分野に関する知識や技能	3.19	0.51
16	グローバルな視点から物事を考える力	3.19	0.60
18	汎用的なモデルを構築する力（ビジネス・モデル，概念モデル等）	3.15	0.67
19	リーダーシップ	3.10	0.83
20	他人に働きかけ巻き込む力	3.00	0.56


現在の仕事で必要な能力と大学院で身につけた能力
4.00
3.80
3.60
3.40
3.20
3.00
2.80
2.80
3.00
3.20
3.40
3.60
3.80
4.00
大学院で身につけた能力（平均値）
現在の仕事で必要な能力（平均値）
複眼的な政策・戦略を立案する力
地域や社会の特性や魅力を見出す力
意見の違いや立場の違いを理解する力
知識を課題解決に応用する力
自分の意見をわかりやすく伝える力
幅広い知識や教養
自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
倫理観・社会的責任を持って物事に取り組む力
地域や組織の現状と課題を俯瞰的に地域や組織全体の中に位置付ける力
地域や組織の現場における現状と課題を明らかにする力
新しい価値を生み出す力
論理的思考力
挑戦する力
地域に貢献する力
戦略や政策を実行する力
グローバルな視点から物事を考える力
専門分野に関する知識や技能
汎用的なモデルを構築する力（ビジネス・モデル，概念モデル等）
リーダーシップ
他人に働きかけ巻き込む力

（注）破線は中央値を表す。


現在の仕事で必要な能力（平均値）と大学院で身につけた能力（平均値）の差
0.80
0.60
0.40
0.20
0.00
-0.20
-0.40
他人に働きかけ巻き込む力
自分の意見をわかりやすく伝える力
論理的思考力
リーダーシップ
専門分野に関する知識や技能
地域や組織の現場における現状と課題を明らかにする力
挑戦する力
複眼的な政策・戦略を立案する力
自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
倫理観・社会的責任を持って物事に取り組む力
新しい価値を生み出す力
グローバルな視点から物事を考える力
汎用的なモデルを構築する力（ビジネス・モデル，概念モデル等）
知識を課題解決に応用する力
戦略や政策を実行する力
幅広い知識や教養
意見の違いや立場の違いを理解する力
地域や組織の現状と課題を俯瞰的に地域や組織全体の中に位置付ける力
地域に貢献する力
地域や社会の特性や魅力を見出す力



（注）破線は中央値を表す。

（４） 地域や社会への関心について（質問 33、34）

研究科入学前の時点における地域や社会への関心、入学後におけるその変化について設問を用意している。

入学前の地域や社会への関心については、関心を有するという回答が 76.2%（16 人）となっている（「高い関心をもっていた」が 33.3%（7 人）、「関心をもっていた」が 42.9%（9 人））。前回アンケート調査（令和 3 年度修了生対象）では、肯定的回答は 80.0%（「高い関心をもっていた」が 26.7%「関心をもっていた」が 53.3%）であった。

入学後の関心の変化については、「関心が高まった」とする回答が 100.0%（21 人）となっている。前回アンケート調査（令和 3 年度修了生対象）では同回答は 86.7%であり、肯定的回答の割合が高くなっている。

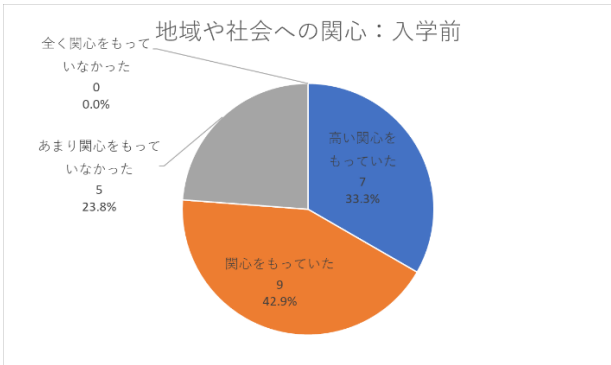


図 19．入学前の地域や社会への関心

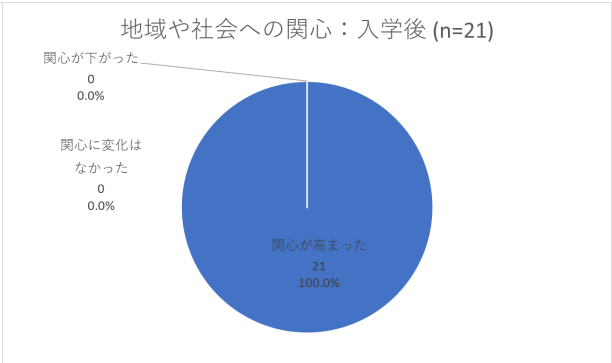
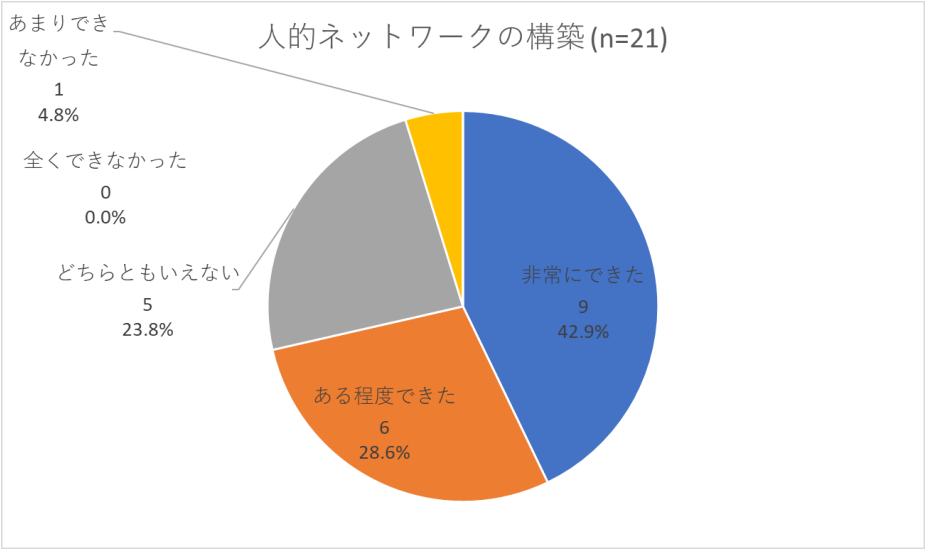


図 20．入学後の地域や社会への関心

（５） 人的ネットワークの構築について（質問 35）

研究科における人的ネットワークの構築については、肯定的な回答が 71.4%（15 人）となっている（「非常にできた」が 42.9%（9 人）、「ある程度できた」が 28.6%（6 人））。前回アンケート調査（令和 3 年度修了生対象）では肯定的な回答は 76.7%であり（「非常にできた」が 16.7%「ある程度できた」が 60.0%）、割合が低下している。



（６） 学んだことに満足しているかについて（質問 36）

総合的な満足度については、肯定的な回答が 95.2%（20 人）となっている（「満足している」が 61.9%（13 人）、「ある程度満足している」が 33.3%（7 人））。前回アンケート調査（令和 3 年度修了生対象）では肯定的回答が 100%である（「満足している」が 60.0%、「ある程度満足している」40.0%）。

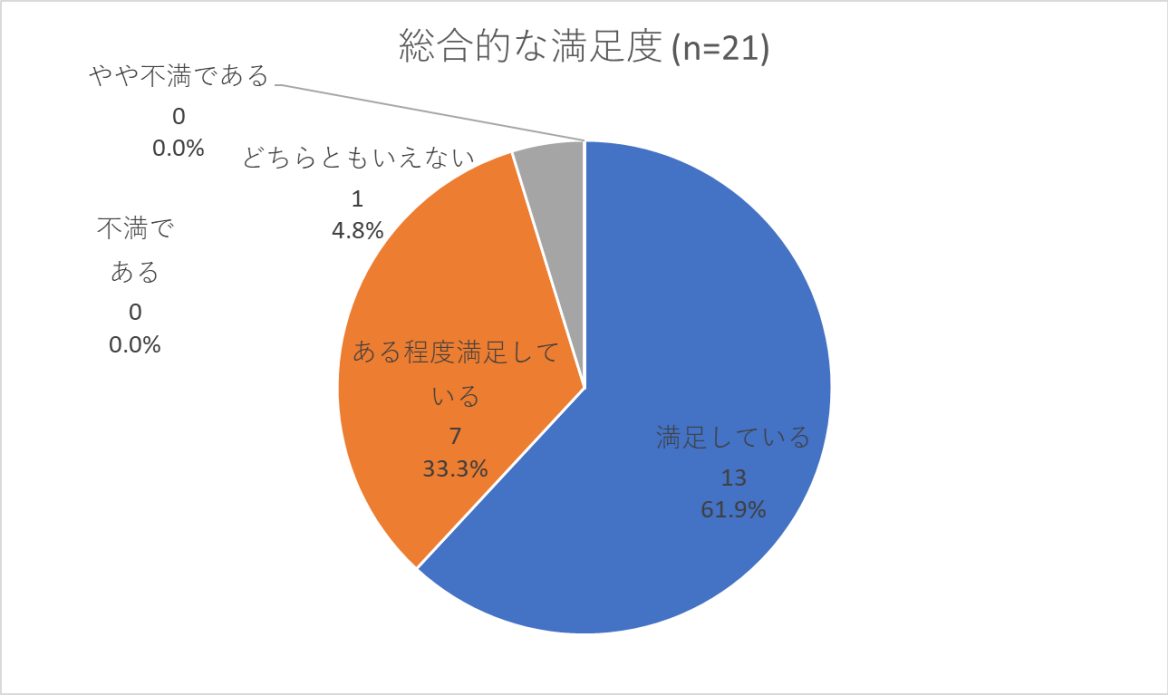


図 22. 学んだことに満足しているか

直近 5 年間における選択肢の内訳の推移を次の表で示す。

	2018	2019	2020	2021	2022
修了生数（人）	31	18	26	34	36
回答数（人）	28	12	25	30	21
回答率（%）	90.3	66.7	96.2	88.2	58.3
満足（%）	63	91.7	84	60	61.9
ある程度満足（%）	33.3	8.3	16	40	33.3
どちらでもない（%）	3.7	0	0	0	4.8
やや不満（%）	0	0	0	0	0
不満（%）	0	0	0	0	0

（７） 愛着について（質問 37）

研究科への愛着については、肯定的な回答が 85.7%（18 人）となっている（「非常にある」が 57.1%（12 人）、「ある程度ある」が 28.6%（6 人））。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では肯定的回答が 100%であり（「非常にある」が 46.7%「ある程度ある」53.3%）、肯定的回答の割合が低下している。

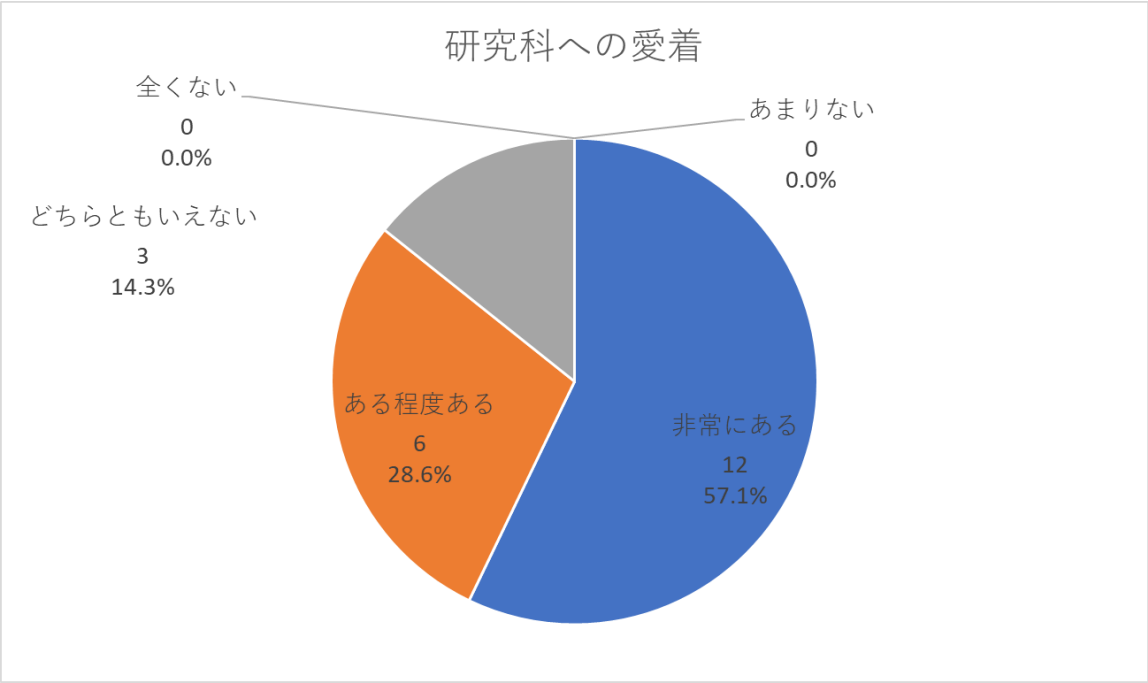

研究科への愛着
全くない
0
0.0%
あまりない
0
0.0%
どちらともいえない
3
14.3%
ある程度ある
6
28.6%
非常にある
12
57.1%

図 23. 愛着があるか

４．　現在の状況について

（１）　自己研修について（質問 39）

能力向上のための自己研修について、「行っている」が 23.8%（5 人）、「予定している」が 19.0%（4 人）で合計 42.8%（9 人）となっている。前回アンケート調査（令和 3 年度修了生対象）では、「行っている」「予定している」の合計は 73.3%であった。

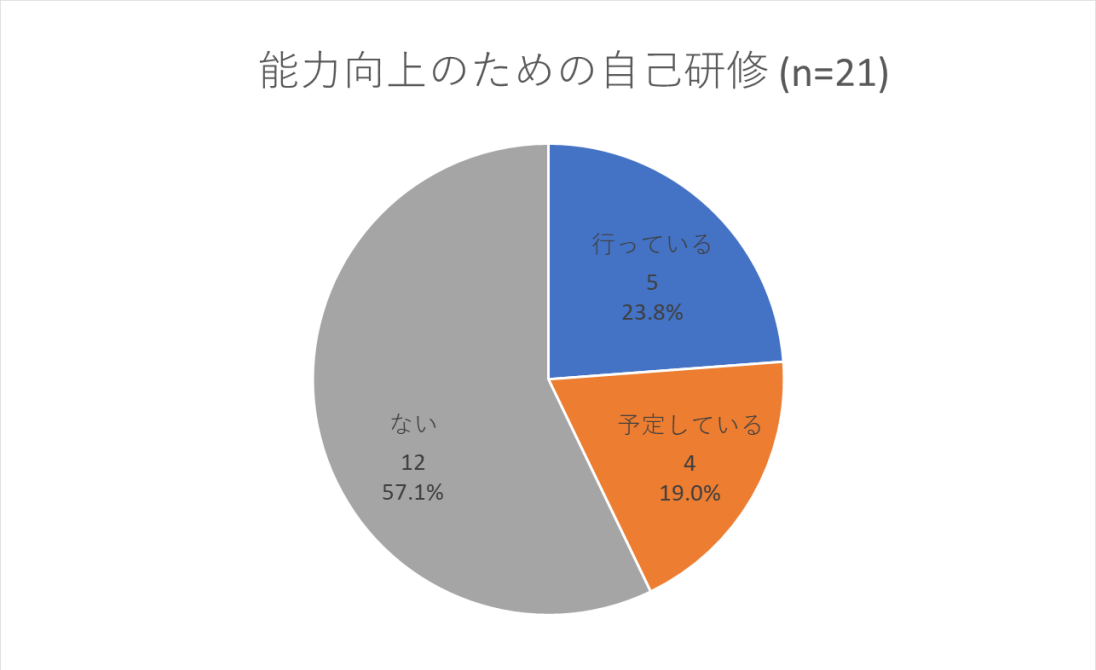


図 24.　能力向上のための自己研修を行っているか

能力向上のための自己研修の内容（質問 39-2　自由記述）
・ポストＭＢＡ ・診断士 ・金融に関する知識の習得や、資格取得等を検討中 ・中小企業診断士取得のための学習 ・ソーシャルキャピタルの論文を毎月読んでいる。 ・英会話を練習しています ・これから仕事で必要になってくる統計分析等を復習しようと思っている ・プロ研のテーマをさらに深めていく予定 ・これからツーリズム関連の仕事に探す予定です。

地域活動について（質問 40）

個人あるいはグループで地域のための活動を行っているかという設問については、「行っている」が 28.6%（6 人）、「予定している」が 4.8%（1 人）で合計 33.3%（7 人）となっている。前回アンケート調査（令和 3 年度修了生対象）では、「行っている」は 16.7%、「予定している」は 20.0%で合計 36.7%であった。

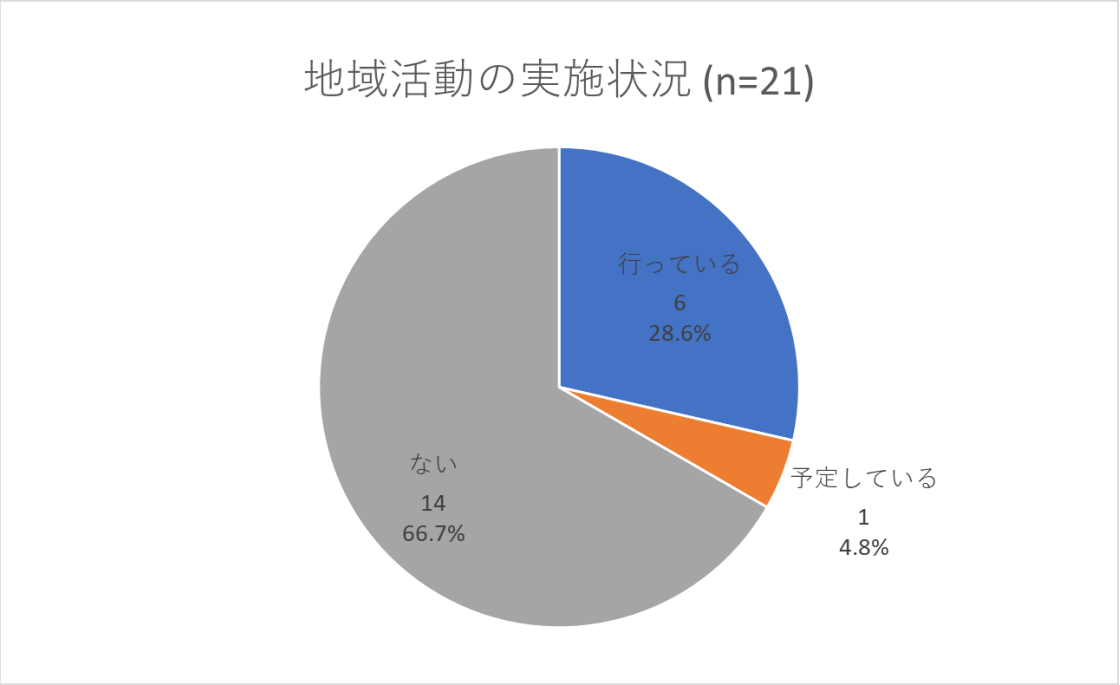


図 25．地域の為の活動を行っているか

地域活動の実施内容（質問 40-2　自由記述）
・子ども食堂支援、
・青少年健全育成活動、青年団体活動、
・講演等
・ボランティア活動、スポーツ推進事業
・金融教育
・子ども食堂の開催、行政との協力による健康教室など地域コミュニティづくりの活動を行っている

（３）研究科開催の講演会・シンポジウムなどについて（質問 41､42）

研究科で開催する講演会・シンポジウムへの参加意向について、肯定的回答「思う」は 85.7%（18 人）となっている。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では同回答は 93.3%であった。

また、研究科で開催する講演会・シンポジウムの開催方法については、「一般公開」とする回答が 90.5%（19 人）であり、「在学生・修了生のみ対象」の回答 4.8%（1 人）を大きく上回っている。前回アンケート調査(令和 3 年度修了生対象)では、「一般公開」が 76.7%、「在学生・修了生のみ対象」が 20.0%となっていた。

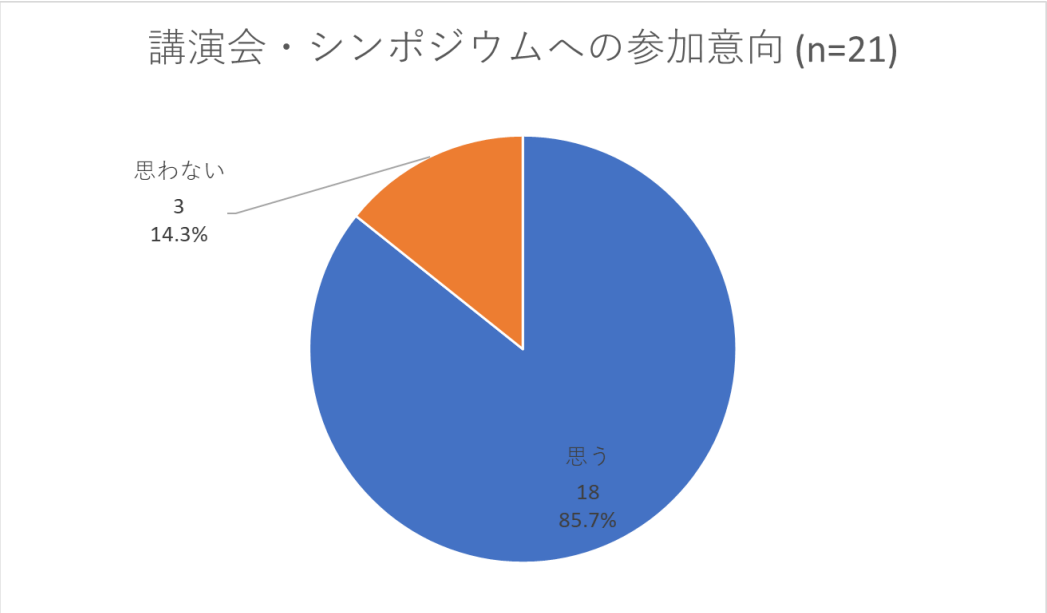


図 26. 講演会・シンポジウムに参加しようと思うか

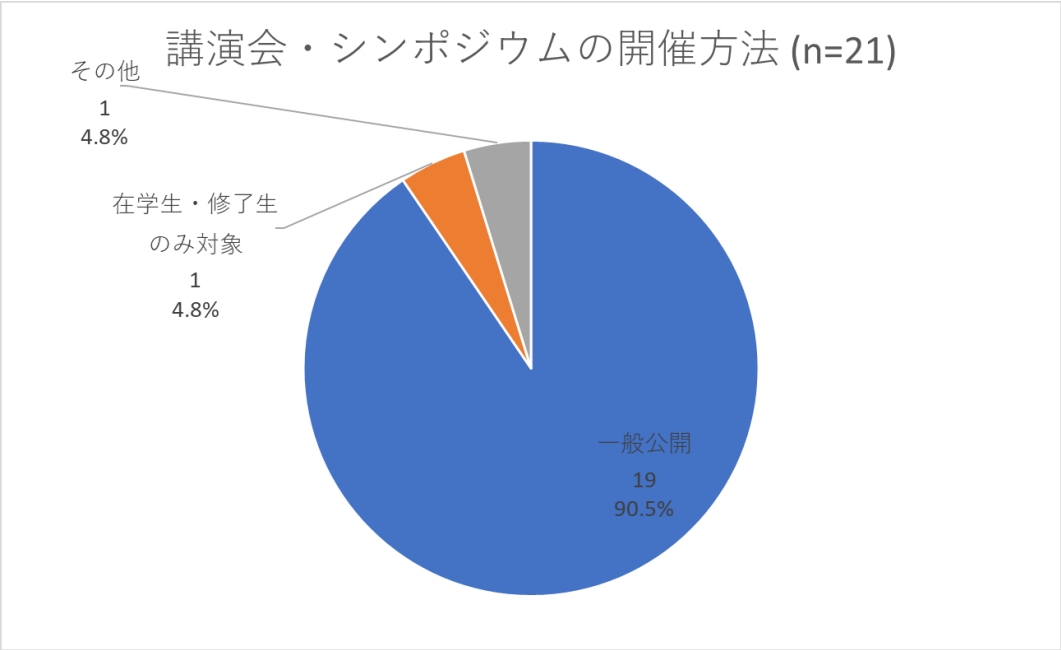


図 27. 講演会・シンポジウムの形式について

（３） 後期（10 月）入学の必要性について（質問 43）

研究科への後期（10 月）入学の必要性については、肯定的回答は 33.3%であった（「非常に必要」が 0.0%（0 人）、「ある程度必要」が 33.3%（7 人））。前回アンケート調査（令和 3 年度修了生対象）では、同回答は 40.0%（「非常に必要」が 3.3%、「ある程度必要」が 36.7%）であり、肯定的回答の割合が低下している。

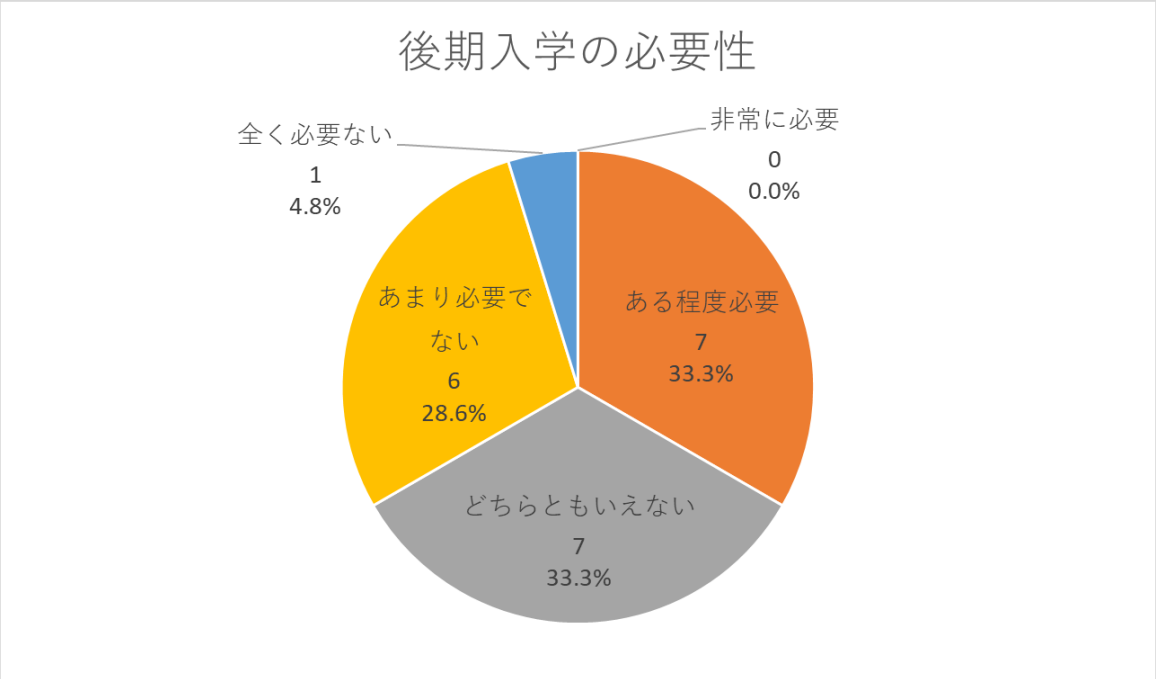


図 28. 後期入学の必要性について

第３章　　自由記述のデータ

質問 19．プロジェクト研究についてどう思いますか。またその理由はなんですか。

・研究時間の確保が難しく、納得のいく研究ができなかった
・先生方の指導やマネジメントに満足していることと、最終的に限られた時間のなかで納得のいくところまで到達できたため。
・思ったよりも今後の課題が多く残った。
・やりたいことができた
・教員の専門的な指導
・かなりの時間を要して、他の講義を受ける余裕がなくなる点がキツイ
・試行錯誤した為
・担当教授がステキだった
・「物事を疑う力」「深い洞察力」「考え抜く力」が身についた。
・十分な指導をいただきましたが、勤務や家庭のことで時間が捻出できず自己の努力が不足していたと感じているから。
・論文の構成。研究の取組を丁寧に指導頂きました。
・先生方が真摯にご指導してくださったから。
・モチベーションの維持が難しかった
・到達度はどうあれ、やり切ることができた
・様々な分野の研究について知ることができるため
・一年間という長いスパンで、一つのテーマを考え続けることができたから
・1 年間の成果として、論文および発表という形にできたため。
・自身のスタート時の理解度が低く、終わったころにやり方がやっとわかったとかんじたため
・楽しかったですし、いろんな人と話ができましたが、今回は目的完全に達成できたわけではないことについてやや残念でした。

質問 38．地域マネジメント研究科のカリキュラム等について自由に意見を記入してください。

・2 年次のプロ研をスムーズに取り組めるよう 1 年次の後期にプレ修士論文的な授業を必修科目に入れることを提案します。
・年間の取得単位数の上限は、不要だと思いました。1 年次に授業を取っておかないと、２年のプロ研で後悔することもあるではないでしょうか。２年次の講義で習った内容を反映させたくても、プロ研が進んでしまっていたり、時間が足りないなどで、満足のいく研究にならないこともあると思います。
・なし
・地マネ論が業務で受講できなかったのが残念だした。
・受講したかったが、諸事情でとれなかった科目があるので、修了後でも受講したい。
・様々な講義があり、幅広く学べたので良かったと思う

質問 44．香川大学、あるいは地域マネジメント研究科がもっと重視したり改善したりした方が良いと思う教育内容や取り組み、要望などがございましたら、ご自由にお書きください。

・瀬戸内地域以外の先進的な取組を外部講師を招いて紹介する授業や、現地視察に行く授業（集中講義）もあると良いと思った。

・例えば、対面授業がないオンラインだけの学生募集もあって良いと思います。それは、全カリキュラムが受講したいのではなく、特定の講義だけを受けたい（自分の専門性を伸ばしたい）等のニーズがあると思います。イメージとしては、ＭＢＡのライト版、入門編、のようなものを作り、門戸を広くしても良いのではないでしょうか。（講義内容を動画にした、e-learning でもよいかもしれません）

・他大学にもあるように、中小企業診断士養成課程を開いてほしい。四国からだと最短で、兵庫県立大学しかなく、現実的ではない

・学部上がりの学生のことももう少し考えていただけるとありがたいです。社会人学生が前提なのは理解していますが、このアンケートにおいても、設問 39（仕事で必要な力）や 64（現在の就業状況）など社会人ではない学生は答えにくいです…。

・特にない。

（注）回答者の特定に繋がる可能性がある自由記述は除いている。